

上磯町

茂 別 遺 跡

—一般国道228号上磯町茂辺地防災工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

第 1 分冊

平成 3 ～ 9 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（西から）



調査風景（北西から）



壕（東から）



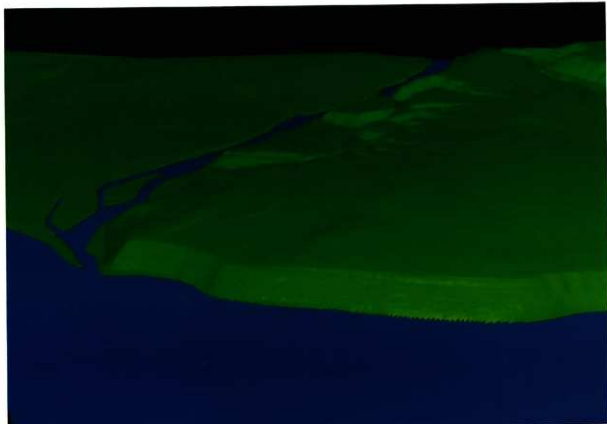
壕 土層断面（東から）



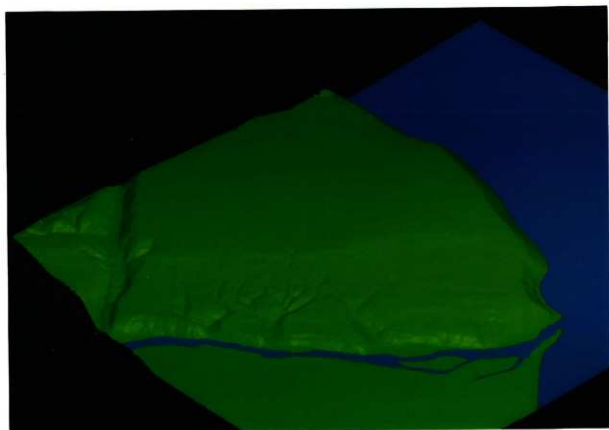
壕 盛土遺物出土状況（南東から）



H-10 土層断面（東から）



遺跡周辺地形鳥瞰図（南東から）



遺跡周辺地形鳥瞰図（西から）



H-2 (北から)



X-13 上面遺物出土状況 (南から)



X-20 上面遺物出土状況（北から）



X-20 墳底遺物出土状況（北から）



X-16 坑底遺物出土状況（南から）



X-24 坑底遺物出土状況（東から）



X-28 坑底遺物出土状況（南から）



P-53 坑底遺物出土状況（西から）



X-3 出土土器



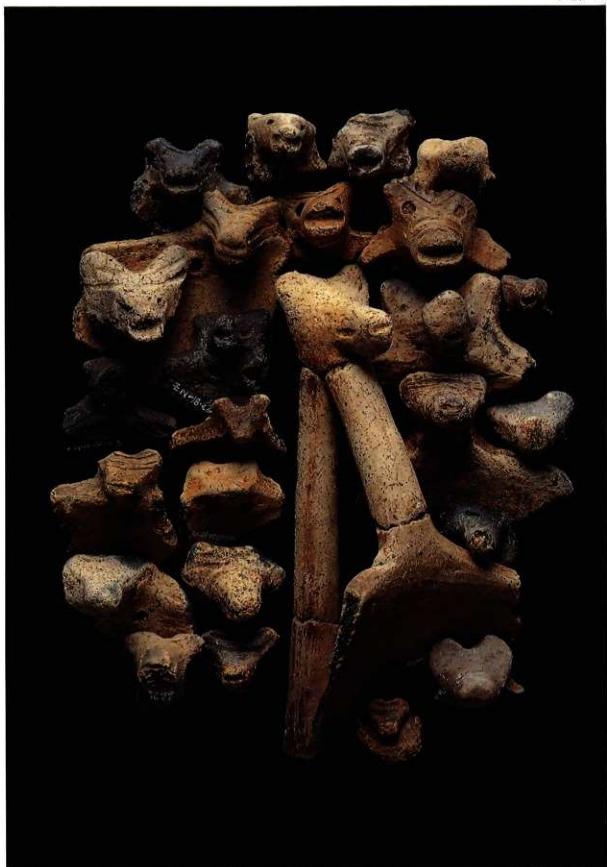
X-20 出土土器



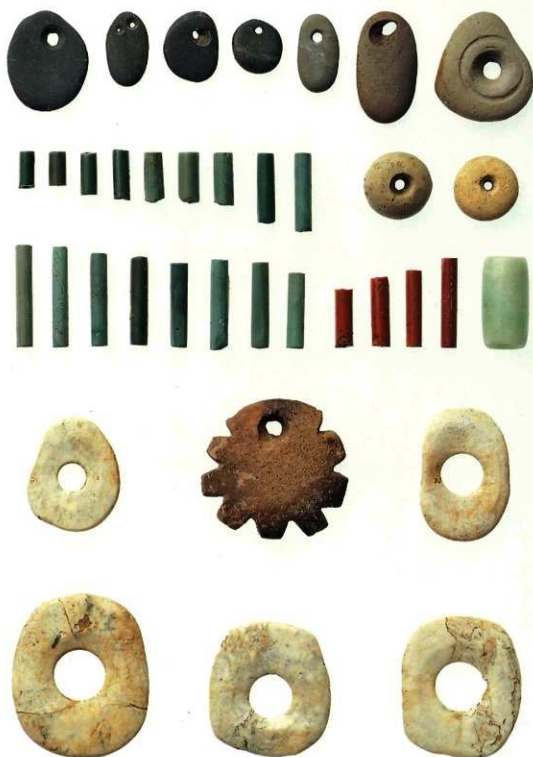
X-14 出土土器



X-28出土 動物意匠のある土器



土器の動物意匠





魚形石器



三角形礫石器



桃形石器



P-53 出土石器

例 言

1. 本書は平成3年度から9年度に当センターが実施した一般国道228号上磯町茂辺地防災工事用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 本書の執筆は、Ⅰ：佐藤和雄・工藤研治・広田良成、Ⅱ：佐藤和雄・花岡正光、Ⅲ：佐藤和雄・工藤研治・広田良成・立田 理・中田裕香・愛場和人、Ⅳ：佐藤和雄・工藤研治・広田良成・立田 理・中田裕香・西脇対名夫、Ⅴ：工藤研治・西脇対名夫、Ⅵ：工藤研治・広田良成・立田 理、Ⅶ：佐藤和雄・工藤研治・広田良成・立田 理・越田賢一郎、Ⅷ-9：花岡正光が担当した。
3. 各種測定、同定、分析等は下記に依頼した。

黒曜石産地同定	京都大学	薬科哲男氏
ヒスイ・碧玉産地同定	京都大学	薬科哲男氏
残存脂肪酸分析	株式会社ズコーシャ	
炭化材の樹種同定	北海道開拓記念館	三野紀夫氏
鉄器の分析	岩手県立博物館	赤沼英男氏
植物珪酸体の分析	帯広畜産大学	近藤鍊三氏
放射性炭素による年代測定	京都産業大学	山田 治氏
植物遺存体の同定	北海道環境文化研究センター	
テフラの鉱物組成	(株)古環境研究所	
	ジオサイエンス(株)	
動物遺存体の同定	早稲田大学	金子浩昌氏

4. 石材鑑定は資料調査課 花岡正光による。
5. 調査報告終了後の出土遺物および記録類については上磯町教育委員会が保管する。
6. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。

文化庁、北海道教育委員会、上磯町教育委員会、北海道開発局函館開発建設部函館道路事務所、上磯町立茂辺地小学校、上磯町立茂辺地中学校、上磯町教育委員会 山本克視・森 靖裕、上磯町立茂辺地中学校 香河正人、七飯町教育委員会 石本省三・横山英介・竹花和晴・菊池博・山田 央、函館市教育委員会 田原良信・中村公宣・佐藤智雄・野戸地初雄・五十嵐貴久・落合治彦、市立函館博物館 長谷部一弘、北海道教育大学函館分校 千代 肇、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田祐二、森町教育委員会 藤田 登、木古内町教育委員会 野村広章・菅野文二・三上英則、知内町教育委員会 高橋豊彦、松前町教育委員会 前田正憲、上ノ国町教育委員会 斎藤邦典、乙部町教育委員会 藤田 巧、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 佐藤一夫・赤石慎三・二階堂啓也、札幌市教育委員会 羽賀憲二・佐藤紀子、恵庭市教育委員会 松谷純一、余市町教育委員会 乾 芳宏・宮 宏明、平取町教育委員会 森岡健治、釧路市博物館 沢 四郎(故)・西 幸隆、青森大学 村越 潔、青森県埋蔵文化財調査センター 三浦圭介・岡田康博・木村 高・小笠原雅行、青森県史編さん室 木村真明、秋田県埋蔵文化財センター 五十嵐一治、東北町教育委員会 古屋敷則雄、福島県文化財保護審議会 中村五郎。

凡 例

1. 遺構の表記は、以下に示す記号を使用した。

H : 住居跡 X : 土墳墓 P : 土墳墓・土墳
F : 焼土 HP : 住居跡内柱穴 MZ : 遺物集中

2. 遺構図の一部で以下に示すスクリーントーンを使用した。

 : 焼土  : 炭化物の広がり
 : 住居跡の硬化した床の範囲  : ペンガラ
 : 住居跡の貼り床部分  : 火山灰

3. 遺物出土状況図、分布図の一部で以下に示す記号を使用した。

覆土出土遺物 ○ : 土器 △ : 剥片石器 □ : 剥片
 ▽ : 礫石器 ◇ : 礫 ☆ : 土・石製品
床面・墳底出土遺物 ● : 土器 ▲ : 剥片石器 ■ : 剥片
 ▼ : 礫石器 ◆ : 礫 ★ : 土・石製品

4. 遺構図の数値は、標高(単位m)である。

5. 遺構の規模は、「確認面での長軸長×単軸長/床(底)面での長軸長×単軸長/確認面からの最大深」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を()で示し、不明のものは—で示した。

6. 実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。

遺 構 1 : 40
復元土器 1 : 3 土器拓本 1 : 2
土 製 品 1 : 2 剥片石器 1 : 2
石 斧 1 : 2 礫 石 器 1 : 3
石 皿 1 : 4 石 製 品 1 : 2

7. 黒色物質の付着している石器はその部分をスクリーントーンで示してある。

8. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

第1分冊目次

口絵

例言

凡例

第1分冊目次

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査にいたる経緯	3
4	調査の概要	5
(1)	発掘区の設定	5
(2)	調査の方法	6
(3)	土層	6
5	遺物の分類	6
(1)	土器	6
(2)	石器等	8
6	調査結果の概要	9
II	遺跡の位置と環境	15
1	上磯町の遺跡	17
2	遺跡周辺の地形と地質	19
III	Ⅲ層中・下部の調査	21
1	概要	21
2	遺構	21
(1)	住居跡	21
(2)	土墳墓	77
(3)	土墳	91
(4)	フラスコ状ピット	107
(5)	粘土採掘穴状土墳群	120
(6)	壕とその関連遺構	127
(7)	集石	171
(8)	焼土	171
3	包含層出土の遺物	175
(1)	土器	175
(2)	石器等	200
IV	Ⅲ層上部の調査	227
1	概要	227
2	遺構	227
(1)	住居跡	227

(2) 土墳墓	282
(3) 土墳	421
(4) P S	442
(5) 石囲炉・焼土	446
(6) M Z	456
3 包含層出土の遺物	462
(1) 土器	462
(2) 石器等	492
V I層の調査	531
1 概要	531
2 遺構	531
(1) 建物跡	531
(2) 土墳	531
(3) 塹壕跡	533
(4) 焼土	534
VI 試掘溝による調査	
1 貝塚	539
2 遺物	540
(1) 土器	540
(2) 貝塚出土の骨加工品	544
(3) 石器等	544
VII まとめ	618
1 遺構	618
(1) 縄文時代の住居跡	618
(2) 縄文時代の土墳墓	618
(3) フラスコ状ピット	619
(4) 粘土探掘穴状土墳群	619
(5) 統縄文時代の住居跡	620
(6) 統縄文時代の土墳墓	621
(7) 統縄文時代の土墳	624
2 土器	625
3 石器	627
4 土製品	630
5 礫	631
引用参考文献	638

挿 図 目 次

図 I-1	発掘区設定図	5
図 I-2	土層断面図	7
図 I-3	遺構位置図(Ⅲ層中・下部)	11
図 I-4	遺構位置図(Ⅲ層上面)	13
図 II-1	当別、茂辺地、矢不來の景色(松浦武四郎『渡島日誌』より)	15
図 II-2	遺跡の位置と周辺の遺跡	16
図 II-3	遺跡周辺の地形	17
図 II-4	遺跡周辺の地形分類図	20
図 III-1	H-6・7・8	22
図 III-2	H-6 出土の土器	23
図 III-3	H-6 出土の石器	23
図 III-4	H-7 出土の遺物	25
図 III-5	H-13	27
図 III-6	H-13出土の遺物	28
図 III-7	H-14	29
図 III-8	H-14出土の遺物	30
図 III-9	H-17(1)	31
図 III-10	H-17(2)	32
図 III-11	H-17出土の土器	33
図 III-12	H-17出土の石器	34
図 III-13	H-10	37
図 III-14	H-10遺物出土状況	38
図 III-15	H-10出土の土器(1)	39
図 III-16	H-10出土の土器(2)	40
図 III-17	H-10出土の石器・石製品	41
図 III-18	H-11(1)	43
図 III-19	H-11(2)	44
図 III-20	H-11(3)	45
図 III-21	H-11出土の土器	46
図 III-22	H-11出土の石器(1)	47
図 III-23	H-11出土の石器(2)・石製品・土製品	48
図 III-24	H-12(1)	50
図 III-25	H-12(2)	51
図 III-26	H-12出土の土器(1)	53
図 III-27	H-12出土の土器(2)	54
図 III-28	H-12出土の土器(3)	55
図 III-29	H-12出土の土器(4)	56

図Ⅲ-30	H-12出土の土器(5)	57
図Ⅲ-31	H-12出土の土器(6)	58
図Ⅲ-32	H-12出土の石器(1)	59
図Ⅲ-33	H-12出土の石器(2)・石製品(1)	60
図Ⅲ-34	H-12出土の石製品(2)・土製品	61
図Ⅲ-35	H-18(1)	63
図Ⅲ-36	H-18(2)	64
図Ⅲ-37	H-18(3)	65
図Ⅲ-38	H-18出土の土器	66
図Ⅲ-39	H-18出土の石器(1)	67
図Ⅲ-40	H-18出土の石器(2)	68
図Ⅲ-41	H-19	70
図Ⅲ-42	H-19出土の土器	71
図Ⅲ-43	H-19出土の石器(1)	72
図Ⅲ-44	H-19出土の石器(2)・石製品	73
図Ⅲ-45	H-20と出土の遺物	74
図Ⅲ-46	H-15	75
図Ⅲ-47	H-15出土の遺物	75
図Ⅲ-48	H-16	76
図Ⅲ-49	P-5	77
図Ⅲ-50	P-6と出土の土器	77
図Ⅲ-51	P-19	78
図Ⅲ-52	P-19出土の石器	79
図Ⅲ-53	P-20と出土の遺物	80
図Ⅲ-54	P-21	81
図Ⅲ-55	P-40と出土の遺物	82
図Ⅲ-56	P-93	83
図Ⅲ-57	P-102	84
図Ⅲ-58	P-102出土の遺物	84
図Ⅲ-59	P-63	85
図Ⅲ-60	P-63出土の遺物	86
図Ⅲ-61	P-99	86
図Ⅲ-62	P-135	87
図Ⅲ-63	P-146	87
図Ⅲ-64	P-147と出土の遺物	88
図Ⅲ-65	P-71	89
図Ⅲ-66	P-71出土の土器	89
図Ⅲ-67	P-152	90
図Ⅲ-68	Ⅲ層中・下部の土壌(1)	92
図Ⅲ-69	Ⅲ層中・下部の土壌(2)	93

図Ⅲ-70	Ⅲ層中・下部の土壌(3).....	94
図Ⅲ-71	Ⅲ層中・下部の土壌(4).....	95
図Ⅲ-72	Ⅲ層中・下部の土壌(5).....	96
図Ⅲ-73	Ⅲ層中・下部の土壌(6).....	97
図Ⅲ-74	Ⅲ層中・下部の土壌(7).....	98
図Ⅲ-75	Ⅲ層中・下部の土壌(8).....	99
図Ⅲ-76	Ⅲ層中・下部の土壌(9).....	100
図Ⅲ-77	Ⅲ層中・下部の土壌(10).....	101
図Ⅲ-78	Ⅲ層中・下部の土壌(11).....	102
図Ⅲ-79	Ⅲ層中・下部の土壌(12).....	103
図Ⅲ-80	土壌出土の土器.....	105
図Ⅲ-81	土壌出土の石器.....	106
図Ⅲ-82	フラスコ状ビット(1).....	108
図Ⅲ-83	フラスコ状ビット(2).....	109
図Ⅲ-84	フラスコ状ビット(3).....	110
図Ⅲ-85	フラスコ状ビット(4).....	111
図Ⅲ-86	フラスコ状ビット(5).....	112
図Ⅲ-87	フラスコ状ビット(6).....	113
図Ⅲ-88	フラスコ状ビット(7).....	114
図Ⅲ-89	フラスコ状ビット(8).....	115
図Ⅲ-90	フラスコ状ビット(9).....	116
図Ⅲ-91	フラスコ状ビット(10).....	117
図Ⅲ-92	フラスコ状ビット出土の土器.....	118
図Ⅲ-93	フラスコ状ビット出土の石器.....	119
図Ⅲ-94	粘土採掘穴状土壌群(1).....	121
図Ⅲ-95	粘土採掘穴状土壌群(2).....	123
図Ⅲ-96	粘土採掘穴状土壌群(3).....	124
図Ⅲ-97	粘土採掘穴状土壌群(4).....	125
図Ⅲ-98	粘土採掘穴状土壌群出土の土器.....	126
図Ⅲ-99	壕.....	128
図Ⅲ-100	壕土層断面図.....	129
図Ⅲ-101	壕盛土上面の地形.....	131
図Ⅲ-102	盛土の厚さ.....	131
図Ⅲ-103	壕関連遺構.....	132
図Ⅲ-104	壕出土の土器(1).....	134
図Ⅲ-105	壕出土の土器(2).....	135
図Ⅲ-106	壕出土の土器(3).....	136
図Ⅲ-107	壕出土の土器(4).....	137
図Ⅲ-108	壕出土の土器(5).....	138
図Ⅲ-109	壕出土の土器(6).....	139

図Ⅲ-110	壕出土の土器 (7)	140
図Ⅲ-111	壕出土の土器 (8)	141
図Ⅲ-112	壕出土の土器 (9)	142
図Ⅲ-113	壕出土の土器 00	143
図Ⅲ-114	壕出土の土器 01	145
図Ⅲ-115	壕出土の土器 02	146
図Ⅲ-116	壕出土の土器 03	147
図Ⅲ-117	壕出土の土器 04	148
図Ⅲ-118	壕出土の土器 05	149
図Ⅲ-119	壕出土の土器 06	150
図Ⅲ-120	壕出土の土器 07	151
図Ⅲ-121	壕出土の土器 08	152
図Ⅲ-122	壕出土の土器 09	153
図Ⅲ-123	壕出土の土器 00	154
図Ⅲ-124	壕出土の土器 01	155
図Ⅲ-125	壕出土の土器 02	156
図Ⅲ-126	壕出土の土器 03	157
図Ⅲ-127	壕出土の土器 04	158
図Ⅲ-128	壕出土の土器 05	159
図Ⅲ-129	壕出土の土器 06	160
図Ⅲ-130	壕出土の土器 07	161
図Ⅲ-131	壕出土の土器 08	162
図Ⅲ-132	壕出土の土器 09	163
図Ⅲ-133	壕出土の石器 (1)	164
図Ⅲ-134	壕出土の石器 (2)	165
図Ⅲ-135	壕出土の石器 (3)	166
図Ⅲ-136	壕出土の石器 (4)	167
図Ⅲ-137	壕出土の石器 (5)	168
図Ⅲ-138	壕出土の石器 (6)・石製品 (1)	169
図Ⅲ-139	壕出土の石製品 (2)・土製品	170
図Ⅲ-140	集石 1・2・3 と集石 2 出土の石器	172
図Ⅲ-141	Ⅲ層中・下部の焼土 (1)	173
図Ⅲ-142	Ⅲ層中・下部の焼土 (2) と F-85 出土の遺物	174
図Ⅲ-143	包含層出土の土器 (1)	178
図Ⅲ-144	包含層出土の土器 (2)	179
図Ⅲ-145	包含層出土の土器 (3)	180
図Ⅲ-146	包含層出土の土器 (4)	181
図Ⅲ-147	包含層出土の土器 (5)	182
図Ⅲ-148	包含層出土の土器 (6)	183
図Ⅲ-149	包含層出土の土器 (7)	184

図Ⅲ-150	包含層出土の土器 (8)	185
図Ⅲ-151	包含層出土の土器 (9)	186
図Ⅲ-152	包含層出土の土器 (10)	187
図Ⅲ-153	包含層出土の土器 (11)	188
図Ⅲ-154	包含層出土の土器 (12)	189
図Ⅲ-155	包含層出土の土器 (13)	190
図Ⅲ-156	包含層出土の土器 (14)	191
図Ⅲ-157	包含層出土の土器 (15)	192
図Ⅲ-158	包含層出土の土器 (16)	193
図Ⅲ-159	包含層出土の土器 (17)	194
図Ⅲ-160	包含層出土の土器 (18)	195
図Ⅲ-161	包含層出土の土器 (19)	196
図Ⅲ-162	包含層出土の土器 (20)	197
図Ⅲ-163	包含層出土の土器 (21)	198
図Ⅲ-164	包含層出土の土器 (22)	199
図Ⅲ-165	包含層出土の石器 (1)	201
図Ⅲ-166	包含層出土の石器 (2)	203
図Ⅲ-167	包含層出土の石器 (3)	204
図Ⅲ-168	包含層出土の石器 (4)	205
図Ⅲ-169	包含層出土の石器 (5)	206
図Ⅲ-170	包含層出土の石器 (6)	207
図Ⅲ-171	包含層出土の石器 (7)	209
図Ⅲ-172	包含層出土の石器 (8)	210
図Ⅲ-173	包含層出土の石器 (9)	211
図Ⅲ-174	包含層出土の石器 (10)	212
図Ⅲ-175	包含層出土の石器 (11)	213
図Ⅲ-176	包含層出土の石器 (12)	215
図Ⅲ-177	包含層出土の石器 (13)	216
図Ⅲ-178	包含層出土の石器 (14)	217
図Ⅲ-179	包含層出土の石器 (15)	218
図Ⅲ-180	包含層出土の石器 (16)	219
図Ⅲ-181	包含層出土の石器 (17)	220
図Ⅲ-182	包含層出土の石器 (18)	221
図Ⅲ-183	包含層出土の石製品 (1)	223
図Ⅲ-184	包含層出土の石製品 (2)	224
図Ⅲ-185	包含層出土の石製品 (3)	225
図Ⅲ-186	包含層出土の石製品 (4)・土製品 (1)	226
図Ⅳ-1	H-1	228
図Ⅳ-2	H-1 出土の遺物	229
図Ⅳ-3	H-2 (1)	231

図IV-4	H-2 (2)	233
図IV-5	H-2 出土の土器 (1)	235
図IV-6	H-2 出土の土器 (2)	236
図IV-7	H-2 出土の土器 (3)	237
図IV-8	H-2 出土の石器 (1)	238
図IV-9	H-2 出土の石器 (2)	239
図IV-10	H-2 出土の石器 (3)	240
図IV-11	H-2 出土の石器 (4)・石製品・土製品	241
図IV-12	H-3	243
図IV-13	H-3 出土の土器	245
図IV-14	H-3 出土の石器 (1)	246
図IV-15	H-3 出土の石器 (2)・石製品	247
図IV-16	H-4	249
図IV-17	H-4 出土の土器 (1)	251
図IV-18	H-4 出土の土器 (2)	252
図IV-19	H-4 出土の土器 (3)	253
図IV-20	H-4 出土の石器・石製品	254
図IV-21	H-5 と出土の遺物	255
図IV-22	H-9 (1)	259
図IV-23	H-9 (2)	261
図IV-24	H-9 (3)	262
図IV-25	H-9 (4)	263
図IV-26	H-9 建物垂直材配置案	264
図IV-27	H-9 覆土中の焼土の分布	265
図IV-28	H-9 付近Ⅲ層上面の地形(上)と出土の土器	266
図IV-29	H-9 覆土の土器出土状況 (1)	267
図IV-30	H-9 覆土の土器出土状況 (2)	268
図IV-31	H-9 覆土の土器出土状況 (3)・掘上土と直下の土器	269
図IV-32	H-9 覆土の石器出土状況 (1)	270
図IV-33	H-9 覆土の石器出土状況 (2)	271
図IV-34	H-9 出土の土器 (1)	273
図IV-35	H-9 出土の土器 (2)	274
図IV-36	H-9 出土の土器 (3)	275
図IV-37	H-9 出土の土器 (4)	276
図IV-38	H-9 出土の土器 (5)	277
図IV-39	H-9 出土の石器 (1)	278
図IV-40	H-9 出土の石器 (2)	279
図IV-41	H-9 出土の石器 (3)	280
図IV-42	H-9 出土の石器 (4)・石製品	281
図IV-43	土壌墓位置図	283

図IV-44	X-1・2・3上面遺物出土状況	284
図IV-45	X-1	285
図IV-46	X-1出土の土器(1)	287
図IV-47	X-1出土の土器(2)	288
図IV-48	X-1出土の土器(3)	289
図IV-49	X-1出土の石器・土製品	290
図IV-50	X-2	291
図IV-51	X-2出土の遺物	293
図IV-52	X-3	294
図IV-53	X-3出土の土器	295
図IV-54	X-3出土の石器・石製品	296
図IV-55	X-5上面遺物出土状況	297
図IV-56	X-5	298
図IV-57	X-5出土の土器	299
図IV-58	X-5出土の石器・石製品	300
図IV-59	X-6と出土の遺物	301
図IV-60	X-7	302
図IV-61	X-7出土の土器	303
図IV-62	X-7出土の石器(1)	304
図IV-63	X-7出土の石器(2)・石製品	305
図IV-64	X-8上面遺物出土状況	306
図IV-65	X-8	307
図IV-66	X-8出土の遺物(1)	309
図IV-67	X-8出土の遺物(2)	310
図IV-68	X-8出土の遺物(3)	311
図IV-69	X-9	313
図IV-70	X-9出土の土器(1)	314
図IV-71	X-9出土の土器(2)	315
図IV-72	X-9出土の石器(1)	317
図IV-73	X-9出土の石器(2)・石製品	318
図IV-74	X-10と出土の遺物	319
図IV-75	X-11と出土の遺物	320
図IV-76	X-12と出土の遺物	321
図IV-77	X-13上面遺物出土状況	322
図IV-78	X-13(1)	323
図IV-79	X-13(2)	324
図IV-80	X-13出土の土器(1)	325
図IV-81	X-13出土の土器(2)	326
図IV-82	X-13出土の石器(1)	328
図IV-83	X-13出土の石器(2)・石製品・土製品	329

図IV-84	X-14	330
図IV-85	X-14出土の遺物	331
図IV-86	X-15	332
図IV-87	X-15出土の土器	333
図IV-88	X-15出土の石器	334
図IV-89	X-15出土の石製品	335
図IV-90	X-16上面遺物出土状況	337
図IV-91	X-16	339
図IV-92	X-16出土の遺物(1)	340
図IV-93	X-16出土の遺物(2)	343
図IV-94	X-16出土の遺物(3)	344
図IV-95	X-17・26上面遺物出土状況	345
図IV-96	X-17・26	347
図IV-97	X-17出土の遺物(1)	348
図IV-98	X-17出土の遺物(2)	350
図IV-99	X-26出土の遺物	351
図IV-100	X-20上面遺物出土状況	353
図IV-101	X-20(1)	355
図IV-102	X-20(2)	356
図IV-103	X-20(3)	357
図IV-104	X-20出土の土器(1)	358
図IV-105	X-20出土の土器(2)	359
図IV-106	X-20出土の土器(3)	360
図IV-107	X-20出土の石器・石製品	361
図IV-108	X-21上面遺物出土状況	363
図IV-109	X-21	365
図IV-110	X-21出土の土器(1)	366
図IV-111	X-21出土の土器(2)	367
図IV-112	X-21出土の石器・石製品	368
図IV-113	X-24上面遺物出土状況	369
図IV-114	X-24	371
図IV-115	X-24出土の遺物	372
図IV-116	X-18上面遺物出土状況	373
図IV-117	X-18	375
図IV-118	X-18出土の土器	376
図IV-119	X-18出土の石器	377
図IV-120	X-28	378
図IV-121	X-28出土の遺物	379
図IV-122	X-22上面遺物出土状況	381
図IV-123	X-22	383

図IV-124	X-22出土の遺物	384
図IV-125	X-23上面遺物出土状況	385
図IV-126	X-23	387
図IV-127	X-23出土の遺物	388
図IV-128	X-19上面遺物出土状況	389
図IV-129	X-19	391
図IV-130	X-19出土の遺物	392
図IV-131	X-25上面遺物出土状況	393
図IV-132	X-25	395
図IV-133	X-25出土の遺物	396
図IV-134	X-27	398
図IV-135	X-27出土の遺物	399
図IV-136	X-29	400
図IV-137	X-29出土の遺物	401
図IV-138	X-30 (1)	402
図IV-139	X-30 (2)	403
図IV-140	X-30出土の遺物	404
図IV-141	P-38	405
図IV-142	P-38出土の遺物	406
図IV-143	P-53	407
図IV-144	P-53出土の土器	408
図IV-145	P-53出土の石器・石製品 (1)	409
図IV-146	P-53出土の石製品 (2)	410
図IV-147	P-57	411
図IV-148	P-57出土の遺物	412
図IV-149	P-61	413
図IV-150	P-61出土の土器	413
図IV-151	P-61出土の石器・石製品	414
図IV-152	P-77	415
図IV-153	P-77出土の遺物	416
図IV-154	P-101	417
図IV-155	P-101出土の遺物	417
図IV-156	P-110	418
図IV-157	P-110出土の土器	418
図IV-158	P-112	419
図IV-159	P-112出土の遺物	419
図IV-160	P-121と出土の遺物	420
図IV-161	Ⅲ層上部の土壌 (1) P-7	421
図IV-162	P-7出土の遺物 (1)	422
図IV-163	P-7出土の遺物 (2)	423

図IV-164	Ⅲ層上部の土壌(2) P-34	424
図IV-165	P-34出土の土器(1)	426
図IV-166	P-34出土の土器(2)	427
図IV-167	P-34出土の石器(1)	428
図IV-168	P-34出土の石器(2)・石製品・土製品	429
図IV-169	Ⅲ層上部の土壌(3)	431
図IV-170	Ⅲ層上部の土壌(4)	432
図IV-171	Ⅲ層上部の土壌(5)	433
図IV-172	Ⅲ層上部の土壌(6)	434
図IV-173	Ⅲ層上部の土壌(7)	435
図IV-174	Ⅲ層上部の土壌(8)	436
図IV-175	土壌出土の土器(1)	438
図IV-176	土壌出土の土器(2)	439
図IV-177	土壌出土の石器(1)	440
図IV-178	土壌出土の石器(2)	441
図IV-179	P S	442
図IV-180	P S出土の土器(1)	443
図IV-181	P S出土の土器(2)	444
図IV-182	P S出土の石器・土製品	445
図IV-183	石罌炉 1・2	446
図IV-184	Ⅲ層上部の焼土(1)	447
図IV-185	Ⅲ層上部の焼土(2)	448
図IV-186	Ⅲ層上部の焼土(3)	449
図IV-187	Ⅲ層上部の焼土(4)	450
図IV-188	Ⅲ層上部の焼土(5)	451
図IV-189	Ⅲ層上部の焼土(6)	452
図IV-190	焼土出土の土器	454
図IV-191	焼土出土の石器・石製品・土製品	455
図IV-192	焼土出土の骨製品	456
図IV-193	M Z出土の土器(1)	457
図IV-194	M Z出土の土器(2)	458
図IV-195	M Z-1 出土の石器	459
図IV-196	M Z-2 出土の石器・石製品	460
図IV-197	M Z-3 出土の石器	461
図IV-198	VI群土器の分布	462
図IV-199	包含層出土の土器 ㉓	463
図IV-200	包含層出土の土器 ㉔	464
図IV-201	包含層出土の土器 ㉕	465
図IV-202	包含層出土の土器 ㉖	466
図IV-203	包含層出土の土器 ㉗	467

図IV-204	包含層出土の土器 ㉔	468
図IV-205	包含層出土の土器 ㉕	469
図IV-206	包含層出土の土器 ㉖	470
図IV-207	包含層出土の土器 ㉗	471
図IV-208	包含層出土の土器 ㉘	472
図IV-209	包含層出土の土器 ㉙	473
図IV-210	包含層出土の土器 ㉚	474
図IV-211	包含層出土の土器 ㉛	475
図IV-212	包含層出土の土器 ㉜	476
図IV-213	包含層出土の土器 ㉝	477
図IV-214	包含層出土の土器 ㉞	478
図IV-215	包含層出土の土器 ㉟	479
図IV-216	包含層出土の土器 ㊱	480
図IV-217	包含層出土の土器 ㊲	481
図IV-218	包含層出土の土器 ㊳	482
図IV-219	包含層出土の土器 ㊴	483
図IV-220	包含層出土の土器 ㊵	484
図IV-221	包含層出土の土器 ㊶	485
図IV-222	包含層出土の土器 ㊷	486
図IV-223	包含層出土の土器 ㊸	487
図IV-224	包含層出土の土器 ㊹	488
図IV-225	包含層出土の土器 ㊺	489
図IV-226	包含層出土の土器 ㊻	491
図IV-227	包含層出土の土器 ㊼	492
図IV-228	包含層出土の土器 ㊽	495
図IV-229	包含層出土の土器 ㊾	496
図IV-230	包含層出土の土器 ㊿	497
図IV-231	包含層出土の土器 ㊱	498
図IV-232	包含層出土の土器 ㊲	499
図IV-233	包含層出土の土器 ㊳	500
図IV-234	包含層出土の土器 ㊴	501
図IV-235	包含層出土の土器 ㊵	503
図IV-236	包含層出土の土器 ㊶	504
図IV-237	包含層出土の土器 ㊷	505
図IV-238	包含層出土の土器 ㊸	506
図IV-239	包含層出土の土器 ㊹	507
図IV-240	包含層出土の土器 ㊺	508
図IV-241	包含層出土の土器 ㊻	509
図IV-242	包含層出土の土器 ㊼	510
図IV-243	包含層出土の土器 ㊽	511

図IV-244	包含層出土の石器 ③9	513
図IV-245	包含層出土の石器 ③9	514
図IV-246	包含層出土の石器 ③7	515
図IV-247	包含層出土の石器 ③8	516
図IV-248	包含層出土の石器 ③9	517
図IV-249	包含層出土の石器 ④0	518
図IV-250	包含層出土の石器 ④1	519
図IV-251	包含層出土の石器 ④2	520
図IV-252	包含層出土の石器 ④3	521
図IV-253	包含層出土の石製品 (5)	523
図IV-254	包含層出土の石製品 (6)	524
図IV-255	包含層出土の石製品 (7)	525
図IV-256	包含層出土の石製品 (8)	526
図IV-257	包含層出土の石製品 (9)	527
図IV-258	包含層出土の石製品 ④0	529
図IV-259	包含層出土の石製品 ④1・土製品 (2)	530
図V-1	建物跡	532
図V-2	P-26	533
図V-3	塹壕周辺の地形 (I層上面)	535
図V-4	塹壕平面図	536
図V-5	塹壕土層断面図	537
図V-6	塹壕出土の遺物	538
図V-7	I層の焼土	538
図VI-1	貝塚位置図	539
図VI-2	貝塚出土の骨加工品	540
図VI-3	試掘溝出土の土器 (1)	541
図VI-4	試掘溝出土の土器 (2)	542
図VI-5	試掘溝出土の土器 (3)	543
図VII-6	試掘溝出土の石器・石製品・土製品	545
図VII-1	礫分布図 (個数)	632
図VII-2	礫分布図 (重量)	632
図VII-3	Rライン礫層位別出土グラフ (重量)	633
図VII-4	Rライン礫層位別出土グラフ (個数)	633
図VII-5	礫の組成グラフ	636
図VII-6	礫の長径と巾径の相關図	637

目 次

表-1	年次別発掘調査結果概要一覧	4
表-2	上磯町遺跡一覧表	18
表-3	包含層出土土器一覧	546
表-4	包含層出土土器等一覧	546
表-5	遺構出土遺物一覧	546
表-6	包含層出土礫一覧	546
表-7	土墳墓(X)出土礫一覧	547
表-8	各遺構出土遺物一覧 (1) 住居跡・土墳墓・土壇等	547
表-9	各遺構出土遺物一覧 (2) 土墳墓	553
表-10	各遺構出土遺物一覧 (3) 壕	556
表-11	各遺構出土遺物一覧 (4) 石囲炉・焼土	556
表-12	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (1) 住居跡	558
表-13	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (2) 土墳墓	558
表-14	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (3) 土壇	559
表-15	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (4) フラスコ状ビット	559
表-16	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (5) 粘土採掘穴状土壇群	559
表-17	Ⅲ層中・下部の遺構一覧 (6) 集石・焼土	560
表-18	Ⅲ層上部の遺構一覧 (1) 住居跡	560
表-19	Ⅲ層上部の遺構一覧 (2) 土墳墓	560
表-20	Ⅲ層上部の遺構一覧 (3) 土壇・PS	560
表-21	Ⅲ層上部の遺構一覧 (4) 石囲炉・焼土	561
表-22	I層の遺構一覧 焼土	561
表-23	遺構出土掲載土器一覧(実測図)	561
表-24	遺構出土掲載土器一覧(拓影) 1	575
表-25	遺構出土掲載土器一覧(拓影) 2 壕出土土器	577
表-26	包含層出土掲載土器一覧(実測図)	577
表-27	包含層出土掲載土器一覧(拓影及び動物意匠付土器実測図)	587
表-28	遺構出土掲載石器等一覧	589
表-29	包含層出土掲載石器等一覧	604
表-30	管玉計測一覧	617
表-31	遺物名と層位の記号一覧	623
表-32	墓出土遺物の組合せ一覧	623
表-33	Ⅵ群土器個体数集計表	626

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	一般国道228号茂辺地防災工用地内埋蔵文化財発掘調査		
委託者	北海道開発局函館開発建設部		
受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター		
受託期間	平成3年4月10日～平成4年3月13日		
発掘期間	平成3年5月10日～平成3年7月13日		
受託期間	平成4年4月17日～平成5年3月23日		
発掘期間	平成4年5月6日～平成4年8月8日		
受託期間	平成5年4月17日～平成6年3月23日		
発掘期間	平成5年5月6日～平成5年7月17日		
受託期間	平成6年4月17日～平成7年3月23日		
発掘期間	平成6年8月29日～平成6年10月31日		
受託期間	平成7年4月17日～平成8年3月23日		
発掘期間	平成7年5月8日～平成7年6月7日		
受託期間	平成8年4月17日～平成9年3月23日		
発掘期間	平成8年5月7日～平成8年7月9日		
受託期間	平成9年4月17日～平成10年3月23日		
発掘期間	平成9年5月6日～平成9年8月9日		
調査遺跡	茂別遺跡（北海道教育委員会登録番号 B-06-17）		
所在地	上磯郡上磯町矢不來96番地		
調査面積	平成3年	1,400㎡	
	平成4年	1,660㎡	
	平成5年	733㎡	
	平成6年	374㎡	
	平成7年	205㎡	
	平成8年	638㎡（330㎡はⅢ層上部まで）	
	平成9年	330㎡（Ⅲ層中・下部）	

2 調査体制

財団法人	北海道埋蔵文化財センター		
平成3年度	理事長	寺山敏保	
	専務理事	永田春男	
	常務理事	中村福彦	
	業務部長	伊藤庄吉	
	調査部長	森田知忠	

	調査第4課長	高橋和樹（発掘担当者）
	主 任	遠藤香澄
	嘱 託	西脇対名夫
平成4年度	理 事 長	寺山敏保
	専務理事	永田春男
	常務理事	中村福彦
	業務部長	伊藤庄吉
	調査部長	森田知忠
	調査第2課長	越田賢一郎（発掘担当者）
	主 任	工藤研治
	文化財保護主事	中田裕香
	嘱 託	西脇対名夫
平成5年度	理 事 長	阿部 茂
	専務理事	永田春男
	常務理事	中村福彦
	業務部長	中野眞吾
	調査部長	森田知忠
	調査第2課長	越田賢一郎（発掘担当者）
	主 任	工藤研治
	嘱 託	西脇対名夫
平成6年度	理 事 長	阿部 茂（5月31日退任） 伊藤一夫（6月1日就任）
	専務理事	永田春男（5月31日退任） 佐藤哲人（6月1日就任）
	常務理事	中村福彦
	業務部長	中野眞吾
	調査部長	森田知忠
	調査第2課長	越田賢一郎
	主 任	工藤研治
	文化財保護主事	愛場和人
平成7年度	理 事 長	伊藤一夫
	専務理事	佐藤哲人
	常務理事	柴田忠昭（4月20日就任） 中村福彦（5月31日退任） 森田知忠（6月1日就任）
	業務部長	山内清志

第1調査部長	畑 宏明
第2調査課長	佐藤和雄（発掘担当者）
主 任	工藤研治（ " ）
文化財保護主事	広田良成

平成8年度	理 事 長	伊藤一夫
	専務理事	佐藤哲人
	常務理事	柴田忠昭
		森田知忠（5月31日退任）
		木村尚俊（6月1日就任）
	業務部長	山内清志
	第1調査部長	畑 宏明
	第2調査課長	佐藤和雄（発掘担当者）
	主 任	工藤研治（ " ）
	文化財保護主事	広田良成
	文化財保護主事	立田 理

平成9年度	理 事 長	伊藤一夫
	専務理事	佐藤哲人
	常務理事	柴田忠昭
	常務理事	木村尚俊
	業務部長	山内清志
	第1調査部長	畑 宏明
	第2調査課長	佐藤和雄（発掘担当者）
	主 任	工藤研治（ " ）
	文化財保護主事	広田良成
	文化財保護主事	立田 理（発掘担当者）

3 調査にいたる経緯

一般国道228号線は、一般国道227号線とともに函館市と江差町を結ぶ道南の主要な幹線道路のひとつである。このうち上磯町富川から当別に至る区間は、標高約40～50mにおよぶ海岸段丘の急崖直下を通っている。昭和54年、平成8年には豪雨により崩落事故が発生している。茂辺地トンネルは、幅が狭く、大型車両の交差走行が不可能であった。そのため、交通渋滞が進んできた。

このような状況のなかで、北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建と記す）は、法面の傾斜の緩和化、茂辺地トンネルのオープンカット、拡幅化の工事を計画した。

この工事区間は、縄文時代の遺跡や中近世の史跡が多数知られており、埋蔵文化財包蔵地の所在が予想された。そのため函館開建と北海道教育委員会（以下道教委と記す）との間でその取り扱いについて事前協議が行われ、道教委は所在確認調査・範囲確認調査を行ってきた。

昭和55年には館野2遺跡の工事立会調査が行なわれている。昭和59年には矢不來2遺跡と矢不來天

表-1 年次別発掘調査結果概要一覧

年 度	面 積	層 位	住居跡	土壇墓	土 城	壕	粘土探掘 穴状土竃群	焼 土	塹 壕	建物跡	出土遺物
平成3年度	1,400	I層				1		1	1		175,860
		Ⅱ層上部	4	8				18		2	
		Ⅱ層中・下部									
平成4年度	1,680	I層									317,633
		Ⅱ層上部	1	4	1			10			
		Ⅱ層中・下部	3	5	11			11			
平成5年度	733	Ⅱ層上部	1		1			1			87,000
		Ⅱ層中・下部	1					10			
平成6年度	374	Ⅱ層上部			1			7			92,000
		Ⅱ層中・下部	2					1			
平成7年度	205	Ⅱ層上部		2	4			1			69,222
		Ⅱ層中・下部	1		1			3			
平成8年度	638	Ⅱ層上部		20	8			18			196,898
		Ⅱ層中・下部	5 (内住居跡2)	3	42						
平成9年度	330	Ⅱ層中・下部	4 (内接縄文4)	11 (内接縄文4)	74 (内接縄文3)		1	7			28,000
計			20 (22)	53	142	1	1	88	1	2	966,613 (包含粘土土壇7群)

満宮跡の範囲確認調査が実施され、昭和61年には矢不來2遺跡、昭和62年には矢不來天満宮跡の発掘調査が行なわれている。茂別遺跡は平成2年に範囲確認調査が実施され、平成3年から平成9年にかけて発掘調査が行なわれた。茂別遺跡の7ヵ年にわたった発掘調査は今回で終了した。

4 調査の概要

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、工事用地の境界杭R5とR4-2を結ぶ直線(Xライン)とこれに直交する直線(14ライン)を基線とし、5m間隔でそれぞれの基線に並行する各ラインを設定した。

R5杭・R4-2杭の測量成果は次のとおりである。

$$R5 \quad X = -248,214.620 \quad Y = +30,108.450$$

$$R4-2 \quad X = -248,182.656 \quad Y = +30,146.604 \quad (\text{平面直角座標系第Ⅱ系})$$

区画線は縦線にアラビア数字、横線にアルファベットによる呼称を与えた。

各発掘区の呼称は南西隅のラインの交点で表示した。例えばQラインと17ラインの交点の南東側がQ-17区となる。遺物の取上げにあたっては各発掘区を1~25に分割した小発掘区を設定している。呼称はQ-17-①、Q-17-②のようになる。

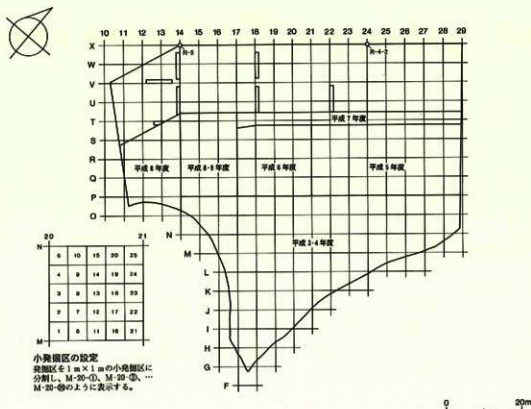


図1-1 発掘区設定図

(2) 調査の方法

調査区の現況がクマイザサの被い茂った杉の植林地であったため、杉とクマイザサを伐採することから調査を開始した。人力による調査は始めに発掘区の設定をした後、Ⅰ・Ⅱ層の調査、Ⅲ層上部での遺構の確認、Ⅲ層の包含層調査、Ⅲ層中・下部での遺構の確認の順で調査を進めた。杉の根は重機で伐根すると包含層を傷めてしまうため包含層を下げ終えた段階で人力により除去した。平成8年度に検出された配石墓群については上面の礫、小礫の出土状態を写真測量により実測した。住居跡や焼土の土壌は可能な限りフローテーション処理した。

包含層の遺物については、1×1mの小発掘区ごとに取り上げた。住居跡・土壌墓・土壌の一部の遺物については、出土位置・高さ・層位を記録した。土壌の大部分の遺物は、流れ込みあるいは混入したものとみられることから遺構ごとに一括して取り上げた。

(佐藤和雄)

(3) 土 層

本遺跡における基本層序は次のとおりである。

Ⅰ層 表土・耕作土

厚さ25～30cm。調査区域は畑地や植林地となっていたため、本来の状態を保っていない部分が多い。

Ⅱ層 火山灰及びその風化土壌

凹地等で部分的に認められる。火山灰は2種あり、上位には駒ヶ岳d火山灰(Ko-d)とみられる白色火山灰、下位には白頭山-苦牧火山灰(B-Tm)とみられる黄色味を帯びた火山灰がある。

Ⅲ層 腐植土

遺物包含層である。色調等から次のように細分した。

Ⅲa層 厚さ約10cm。黒色を呈し、やや軟らかい。主に縄文時代の遺物が出土するが、下部からは縄文時代後期初頭から晩期にかけての遺物も出土する。

Ⅲb層 厚さ10～15cm。黒色を呈する。縄文時代の遺物が出土する。

Ⅲc層 厚さ約10cm。黒褐色を呈し、少し硬い。縄文時代の遺物が出土する。

Ⅳ層 漸移層

厚さ5～15cm。暗黄褐色を呈する。

Ⅴ層 黄褐色ローム

なお、Ⅲ層についてはⅢa層をⅢ層上部、Ⅲb層、Ⅲc層をⅢ層中・下部と記載する場合がある。

5 遺物の分類

(1) 土 器

出土した資料には縄文時代早期から晩期の各時期及び縄文時代に属するものがある。現地整理の段階から、便宜的に、縄文時代早期の資料をⅠ群、前期の資料をⅡ群、中期の資料をⅢ群、後期の資料をⅣ群、晩期の資料をⅤ群、縄文時代の資料をⅥ群として整理をすすめてきた。本書ではそれぞれ二、三の類別を設けて記載する。

Ⅰ群土器

本群に属する資料には前半期の貝殻文の施された資料と後半期の縄文の施された資料があり、前者

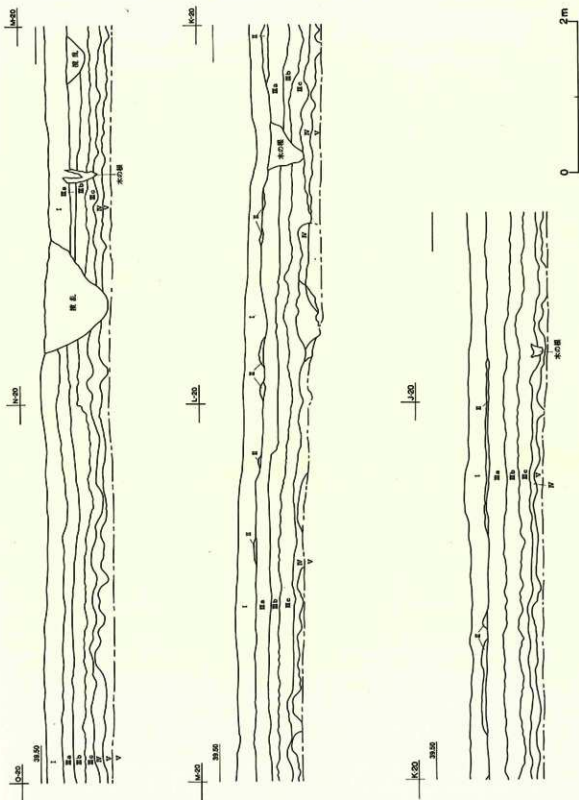


图 I-2 土层断面图

をA類、後者をB類とする。本書で報告するA類土器には貝殻文の施された尖底土器と、沈線文等が施された平底の資料がある。B類土器には東釧路Ⅱ式に関連するとみなされるもの、中茶路式、東釧路Ⅳ式に相当するものがある。

Ⅱ群土器

本群に属する資料は前半期の縄文の施された尖底土器が主体となるグループと後半期の円筒土器下層式に相当するものに大きく二分され、前者をA類、後者をB類とする。A類には奥尻町松江遺跡出土資料に相当するもの、網文式に相当するもの、春日町式に相当するものがある。大木2b式に相当する資料及びそれに類する資料もこれに含める。

Ⅲ群土器

本群に属する資料には円筒上層a式、b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当する前半期の資料と榎木林式の後半のもの、大安在B式、ノグツⅡ式、煉瓦台式に相当する後半期のものがある。前者をA類、後者をB類とする。

Ⅳ群土器

天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式に相当する前葉の資料をA類、手稲式、鯉洞式に相当する中葉のものをB類、堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当する末葉のものをC類とする。A類には大木Ⅱ式に後続するとみなされる資料も含めている。

Ⅴ群土器

日ノ浜式に相当する末葉の資料が少量出土している。

Ⅵ群土器

本群に属する資料には恵山式と後北式がある。恵山式は本遺跡の主体となる資料である。後北式は後北C1式が少量出土している。

(工藤研治)

(2) 石器等

石器等は大別して剥片石器、磨製石器、礫石器、石製品、土製品、その他がある。

I 剥片石器

石鏃、石銛、石槍、石錐、つまみ付きナイフ(石匙)、靴形石器、両面調整石器、篋状石器、スクレイパー、抉入石器、鋸歯縁石器、両極石器、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片(フレイク・チップ)、原石がある。石鏃は尖頭部をもち、幅の広い茎部を有するもの。形態上は石鏃・石槍に類似し、大きさは石鏃よりやや大形である。石槍は尖頭部をもち、比較的大形のもの。偏平な礫を素材とするものもここに含める。靴形石器はいわゆる石ナイフ。柄部を有し、片面もしくは両面加工によって刃部が作出されたもので、ほとんどが左右非対称である。両面調整石器は両面が加工された石器で上記の分類に含めることのできないもの。一部の片面加工のものおよび靴形石器以外のナイフ状石器もここに含める。スクレイパーは連続する剥離によって刃部が作出されているもので、大きく分けて柄部を有する定形的なものと、不定形のものがある。柄部をもつ定形的なものの一部は靴形石器との区別が困難である。抉入石器はスクレイパーの中で抉りのある刃部をもつもの。鋸歯縁石器はスクレイパーの中で鋸歯状の刃部をもつもの。両極石器はいわゆる楔形石器で、平坦で対向する細部調整をもつもの。剥片石器片は剥片石器の破片の中で、器種を特定できないもの。Rフレイクは加工痕を有する剥片。剥片にはいわゆるUフレイクも含める。原石は、剥片を取るための加工が施されていない礫で、ほとんどが頁岩製である。

II 磨製石器

磨製石斧、環状石斧、磨製石器片、擦切残片、磨製石器剥片がある。磨製石斧はいわゆる石のみも含める。環状石斧は両面に研磨が施され、環状の刃部を有するもの。磨製石器片は磨製石器の破片で、器種を特定できないもの。磨製石器剥片は磨製石器の製作過程で生じたと思われる剥片である。

III 礫石器

たたき石、すり石、砥石、石鋸、石皿・台石、石錘、礫器、加工痕ある礫、礫石器片、礫・礫片がある。たたき石はいわゆる凹石も含める。すり石は北海道式石冠、偏平打製石器も含める。砥石はすり面がやや窪んだもの、もしくは線状の擦痕を有するもの。石鋸は側面に突出したすり面をもつもの。礫器は端部に連続する剥離を加えて刃部が作出されているもの。石鋸、礫器の一部はすり石との区別が困難である。礫石器片は礫石器の破片で、器種を特定できないもの。礫・礫片は焼礫を含む。

IV 石製品

魚形石器、玉類、三角形礫石器、線刻礫、青竜刀形石器、石棒、有孔自然石、異形自然石、軽石、未分類石製品、石製品剥片がある。魚形石器は棒状で両端が細くなり、紡錘形、鯉節形を呈するもの。全体が研磨されている。玉には管玉、垂玉、環石がある。垂玉は素材となる礫の一端、もしくは中央に穿孔が施されているもの。環石はほぼ円形かつ偏平に形が整えられ、大きめな穿孔が施されたもの。三角形礫石器は偏平な礫を素材とし、その片面に連続する剥離が加えられ正三角形に整形されたもの。いわゆる三脚石器と類似している。円形、四角形、五角形状のものもある。有孔自然石はいわゆる虫喰い石で、孔の空いた自然石。異形自然石はいわゆるひょうたん石。軽石には軽石製石製品も含める。未分類石製品は以上の器種にあてはまらないもので、いわゆる異形石器も含める。石製品片は石製品の破片で、器種を特定できないもの。石製品剥片は石製品製作の過程で生じたと思われる剥片である。

V 土製品

円盤状土製品、三角形土製品、焼成粘土塊、未分類土製品、土製品片がある。未分類土製品は上記の器種にあてはまらないもの。土製品片は土製品の破片で、器種を特定できないものである。

VI その他

骨角器、骨、炭化物、近・現代遺物等がある。

(広田良成)

6 調査結果の概要

7カ年にわたる調査では、縄文時代・統縄文時代の遺構と遺物が多量に発見された。この他、近世以降の遺構と遺物が僅かに得られた。縄文時代のものには大規模な壕の一部、堅穴住居跡、土墳墓、土塋等と、早期から晩期にかけての遺物がある。統縄文時代のものには集落跡、土墳墓群とこれらに伴う多量の遺物がある。遺物の総数は、約970,000点でこのうち土器が約370,000点、石器等が約600,000点である。

縄文時代の遺構と遺物

検出された遺構は、住居跡12軒、住居跡様遺構2軒、壕の一部1基、土墳墓15基、土塋52基、粘土採掘跡と考えられる土塋群1カ所、集石3カ所、焼土23カ所である。

住居跡は前期、中期、後期に属するものが検出されている。前期のものは遺構の重複が多く全体の判るものはない。中期のものは方形に近い円形の平面形で、比較的掘り込みの深いものが多い。後期のものは卵形の平面形をもち、中央部からやや先端寄りに石囲い炬をもつ。

壕は地表から沢状の凹地として認められ、崖ぎわから調査区外の台地の奥へ向かって延びている。掘り込み面はⅢ層の中ほどで、底はⅤ層を掘り込んでいる。掘りあげた土は両側に盛られ、尾根状の高まりになっている。時期は後期初頭の余市式土器のものとみられる。

土壌墓は前期のものが多く、楕円形もしくはそれに近い平面形をもち、ベンガラが確認されるものが多い。

土壌にはフラスコ状ピット・性格不明の土壌がある。フラスコ状ピットは調査区西側の台地縁辺部から斜面にかけて集中している。続縄文時代の遺構と重複しているものが多い。粘土採掘跡と考えられる土壌群は、調査区西側の台地縁辺部に51基の土壌が集中していた。Ⅴ層を深く掘り込んでおり、重複している。平面形は円形と楕円形が多い。時期は出土した土器からみて早期後半の中茶路式期と考えられる。

出土した土器には縄文時代各時期のものがある。早期の土器は貝殻文土器、中茶路式、表館Ⅵ～Ⅸ群、東釧路Ⅳ式がある。前期の土器は松江式、円筒土器下層式が多く出土している。中期の土器は円筒土器上層式、サイベツⅧ式が多く、大安Ⅱ式、ノダツⅡ式、レンガ台式もある。後期の土器は余市式、涌元Ⅰ式がある。石器には石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、たたき石、すり石がある。その他に三角形礫石器、青竜刀形石器、円盤状土製品、三角形土製品等の土・石製品がある。

続縄文時代の遺構と遺物

検出された遺構は、住居跡6軒、土壌墓38基、土壌27基、焼土57ヵ所（石囲い炉2基含む）である。住居跡は平坦部にある1軒を除いて、海側に面した台地の先端部に集中している。平面形は円形で、掘込みは浅い。この時期の住居跡にみられる舌状の張出し部は確認されない。炉跡をもつものが3軒あり、いずれも中央部に石囲い炉がある。H-9住居跡の土壌からはヒエ属の種子がまとめて検出された。

土壌墓は台地の縁辺部と斜面部に集中しており、大きく3つの群をなしている。これらの多くは土壌の上部や周囲に多数の礫がみられる配石墓である。配石墓は土壌の上部が陥没しており、その凹みに火山灰が堆積した状態で確認されている。遺体が確認された墓は2基ある。いずれも西方頭位の埋葬と考えられる。

副葬品には壺形・甕形・鉢形・ミニチュア等の土器、石鏃、靴形石器、スクレイパー、磨製石斧、魚形石器、碧玉製の管玉、ヒスイ製の玉、環石、サメの歯等がある。

出土した土器は西桔梗B2遺跡や南川Ⅲ群土器等に相当する恵山式土器の古い段階のものが多く、少量ではあるが後北式土器もある。その他、熊とみられる獣形把手が出土している。石器等は石鏃、石錐、たたき石、すり石、砥石が出土している。この時期に特徴的な靴形石器、魚形石器もある。

中近世以降の遺構と遺物

検出された遺構は、塹壕1基、建物跡2軒、焼土3ヵ所である。塹壕および周辺から小銃弾・鉛塊・ボタンが出土している。これらの遺物からみて塹壕は旧幕府軍が構築した陣地の可能性がある。

なお、平成3年から続いていた発掘調査は今年度で終了した。

（佐藤和雄）

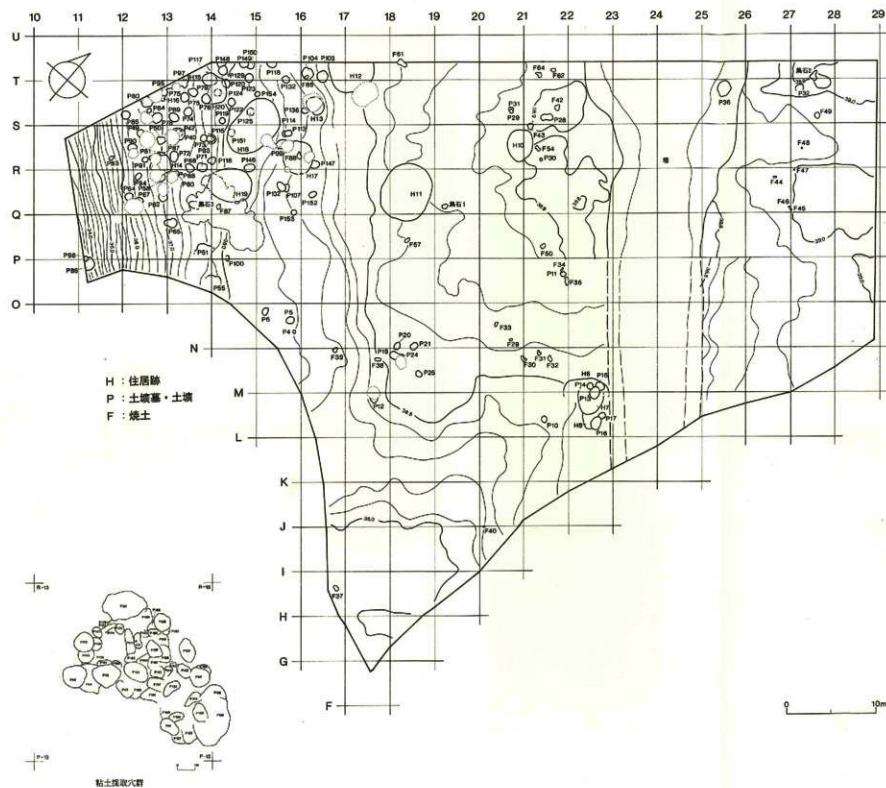


図 I-3 遺構位置図 (Ⅲ層中・下部)

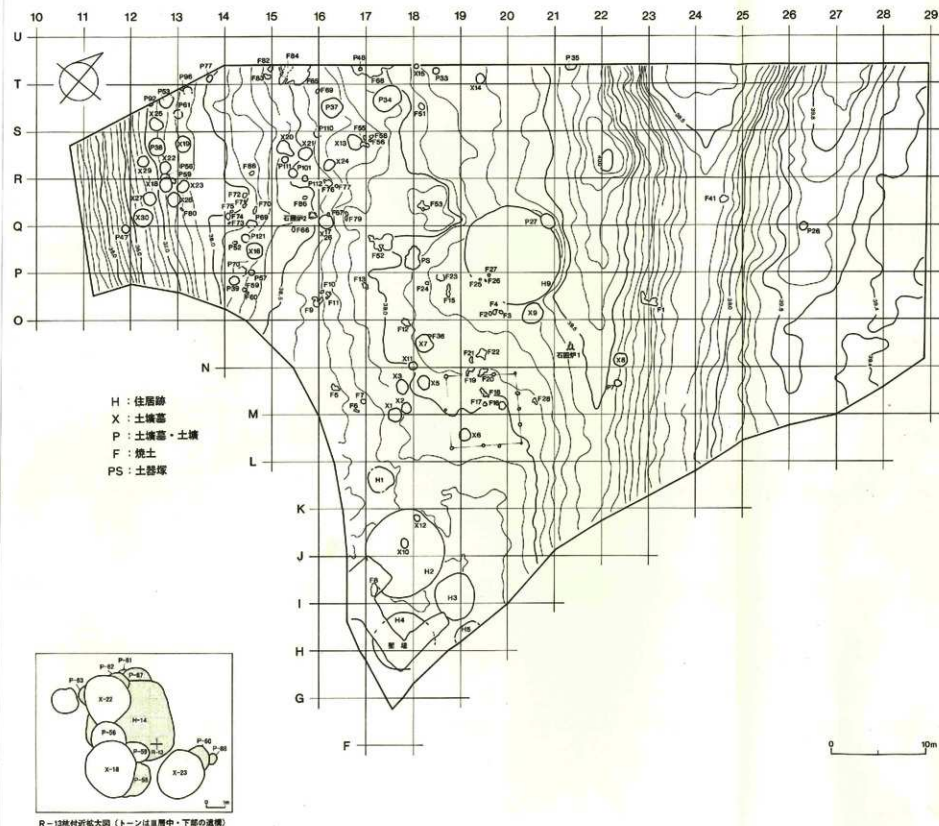


図1-4 遺構位置図(Ⅲ層上面)

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

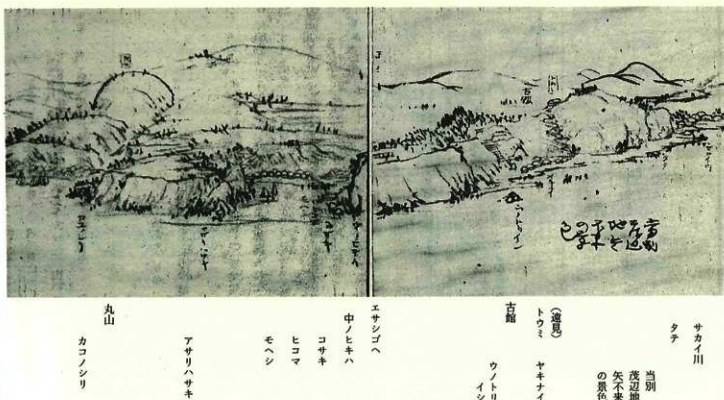
茂別遺跡は松前半島の東側にある茂辺地川河口左岸の丘陵上に位置している。南東側は函館湾で、函館山まで約7kmの距離である。西側は茂辺地川に続く急崖になっており、対岸には茂辺地市街がひろがっている。

遺跡のある台地は標高39～40mである。台地の平坦部から緩い斜面にかけては畑地や杉の植林地として利用されている。遺跡の一部も調査前まで杉が植林されており、現在でも北西側の隣接地には杉林が残っている。

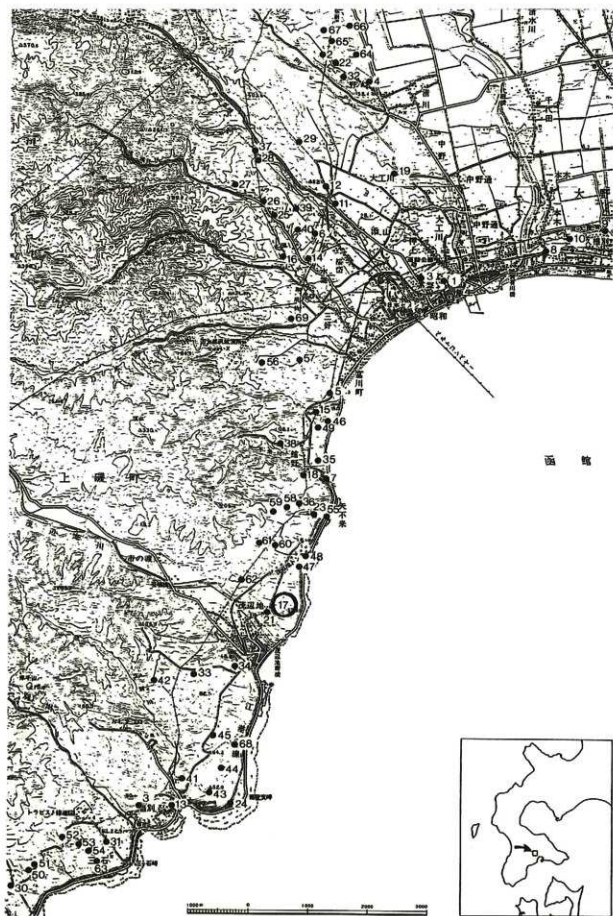
この杉林の中には調査区から続く縄文時代の「壕」がある。北西方向に幅約20m、長さ約200mの規模で町道の手前まで延びているのが確認できる。町道を横切った所には茂別館跡（現在、矢不來天満宮）がある。

茂別の地名は茂辺地川のアイヌ語名モ・ベチ（静かな・川）に由来すると考えられている。¹ 山田秀三は上流の流れをみてこの解釈に疑問をもち、上原熊次郎地名考²に書かれているムー・ベツ（塞る・川）のほうが地形上からみて妥当なものとしている。³ 茂別は後に茂辺地と書かれるようになった。現在の標準語で仮名をつけたためこうなったが昔の東北弁ではどちらで書いても同じ発音であったらしい。⁴

安政3年には松浦武四郎がこの地を通っている。日誌には矢不來村、天満宮、茂辺地川、茂辺地村等の様子が記されている（図II-1）。⁵



図II-1 当別、茂辺地、矢不來の景色（松浦武四郎『渡島日誌』より）



上磯町の遺跡

上磯町では遺跡が多数確認されている。このうち縄文時代の遺跡が大半を占め、中でも中期・後期の遺跡が多い。この他縄文時代早期・前期・晩期及び続縄文時代の遺跡がある。旧石器時代の遺物は発見されおらず、擦文時代の遺跡は少ない。これらの遺跡は松前半島東岸の海岸段丘上と函館平野西側の台地から山裾に分布している（図Ⅱ-2）。

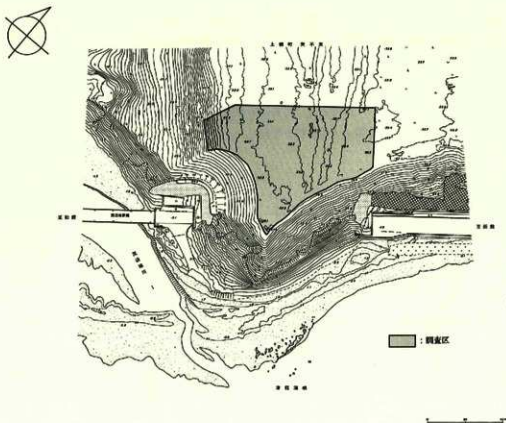
茂別遺跡の周辺では茂辺地川の対岸に縄文時代中期・後期の茂辺地1遺跡、縄文時代中期の茂辺地2遺跡がある。上流側には縄文時代中期から擦文時代の矢不來7遺跡、北東側の段丘上には縄文時代前期から後期・続縄文時代の矢不來2遺跡、縄文時代の矢不來6遺跡がある。

発掘調査は昭和30年代に上磯町郷土史研究会によって行われ、その後上磯町教育委員会や(財)北海道埋蔵文化財センターが調査を行っている。

館野2遺跡は昭和55年に工事立会で縄文時代中期の竪穴住居跡が5軒検出されている。遺物は縄文時代早期から後期前葉の土器とそれに伴う石器・土製品が出土している。

矢不來2遺跡は昭和61年に発掘調査が行われた。調査区は縄文時代前期の石器製作の場と考えられている。縄文時代前期の竪穴住居跡が1軒検出され、縄文時代前期、後期、続縄文時代の遺物が出土している。

平成元年には矢不來3遺跡と三ッ石遺跡の発掘調査が町教委によって行われている。矢不來3遺跡はこの周辺では少ない擦文時代の遺跡である。擦文時代前期の住居跡が2軒検出され、これに伴う遺物が出土している。三ッ石遺跡からは土壌、石組み炉、焼土が検出され、縄文時代前期～中期の遺物が出土している。



図Ⅱ-3 遺跡周辺の地形

平成3年には三ッ石2遺跡と石倉野3遺跡の発掘調査が町教委によって行われた。三ッ石2遺跡からは縄文時代後期の竪穴住居跡や土壌、焼土等が検出されている。遺物は縄文時代早期・中期・後期・続縄文時代の土器・石器が出土している。石倉野3遺跡からは縄文時代中期・後期の遺物が出土している。

茂辺地遺跡では重要文化財の人面付注口土器が出土している。土器は縄文時代後期末のもので完形品である。発見者の落合計策氏は土器が土盛と配石をもった遺構から出土しており、墓の副葬品の可能性があるとしている。⁶ 茂辺地遺跡は道教委の埋蔵文化財包蔵地分布図にある茂別遺跡のことである。出土地点は今回調査した地区から約500m北の町道脇である。

上磯町にはこれらの遺跡のほかに茂別館跡、矢不來館跡、戸切地陣屋跡、矢不來天満宮跡、矢不來台跡、富川砲臺跡等の中・近世の史跡がある。茂別館は嘉吉3年(1443)に津軽から渡った安東盛季によって築かれた。長祿元年のコシャマイン戦争時に諸館が陥落するなか、上ノ国の花沢館とともに最後まで守りぬいたことで有名である。矢不來館跡は茂別館跡から北へ約1.8kmに位置する。これまでは茂別館に比べて格下のイメージがあったが最近の調査で矢不來館の方がより重要な館であった可能性がでてきた。⁷ 戸切地陣屋跡は松前藩が安政2年に北方警備のために築かれ、明治元年の戊辰戦争で焼失している。昭和40年に国の史跡に指定され、史跡の整備は昭和54年からおこなわれており、現在も継続中である。

(佐藤和雄)

注

- 1 永田方正 1891 北海道蝦夷語地名解
- 2 上原熊次郎 1824 蝦夷地名考並里程記(註3で引用している)
- 3 山田秀三 1984 北海道の地名
- 4 註3と同じ
- 5 松浦武四郎 1856 武四郎廻船日記
- 6 落合治彦 1997 茂辺地出土「人面注口土器」について『南北北海道考古学情報』第7号
- 7 函館新聞 1997年12月15日発行 高知大学の市村高男教授と青森県史中世部会専門委員の小山彦逸氏が調査を行い連続縦土壘や大手虎口を発見した。

表2 上磯町遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	所在地	番号	遺跡名	時代	所在地
1	下郡山遺跡	続縄文時代	常盤3丁目73-1ほか	18	矢不來遺跡	縄文時代	館野154
2	清川遺跡	縄文時代 中期	野崎183-2ほか	19	大工川1号遺跡	縄文時代 中期	大工川188-1
3	当別遺跡	縄文時代	当別287-1ほか	21	茂別館跡	中世	矢不來121-1ほか
4	野崎遺跡	縄文時代 前期-続縄文	野崎100-1	22	松前藩戸切地陣屋跡	近世	野崎66-10, 100-9
5	寺坂館遺跡	縄文時代	定住256ほか	23	矢不來台跡	近世	矢不來356ほか
6	板谷遺跡	縄文時代 前期・中期・後期	板谷187-4ほか	24	島登志遺跡	続縄文時代	茂辺地749
7	ヤギナイ遺跡	縄文時代 中期・後期・晩期	館野47-1ほか	25	板谷3遺跡	縄文時代 早期-後期	板谷205-8ほか
8	重浜遺跡	縄文時代	重浜2丁目318-2ほか	26	板谷3遺跡	縄文時代 後期-晩期	板谷209-38ほか
9	久根別A遺跡	縄文時代 晩期	久根別町目56-6ほか	27	板谷4遺跡	縄文時代 中期	板谷209-58, 59
10	久根別B遺跡	縄文時代	久根別町1-1ほか	28	板谷5遺跡	縄文時代 後期-晩期	板谷209-68ほか
11	赤山遺跡	縄文時代 晩期	赤山148ほか	29	赤山3遺跡	縄文時代	赤山054-1, 305-1ほか
12	赤山2遺跡	縄文時代	赤山198ほか	30	フコマ野遺跡	縄文時代 中期-後期	三ッ石341-1ほか
13	赤山神社遺跡	縄文時代 中期	当別333ほか	31	三ッ石遺跡	縄文時代 前期-中期	三ッ石305-31ほか
14	水堀遺跡	縄文時代 後期	板谷201-3ほか	32	清川2遺跡	縄文時代 中期	野崎66-1ほか
15	館野遺跡	縄文時代 前期	館野1, 2, 3	33	茂辺地1遺跡	縄文時代 中期-後期	茂辺地775ほか
16	館小坂遺跡	縄文時代	水堀136-1ほか	34	茂辺地2遺跡	縄文時代 中期	茂辺地749-1ほか
17	茂別館跡	縄文時代 中期-後期	矢不來77-2ほか	35	館野3遺跡	縄文時代 中期-後期	館野17-1ほか

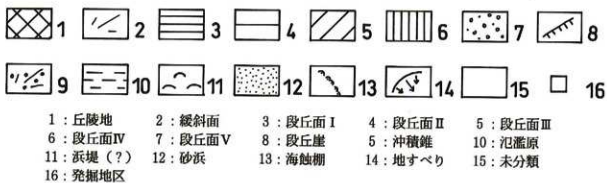
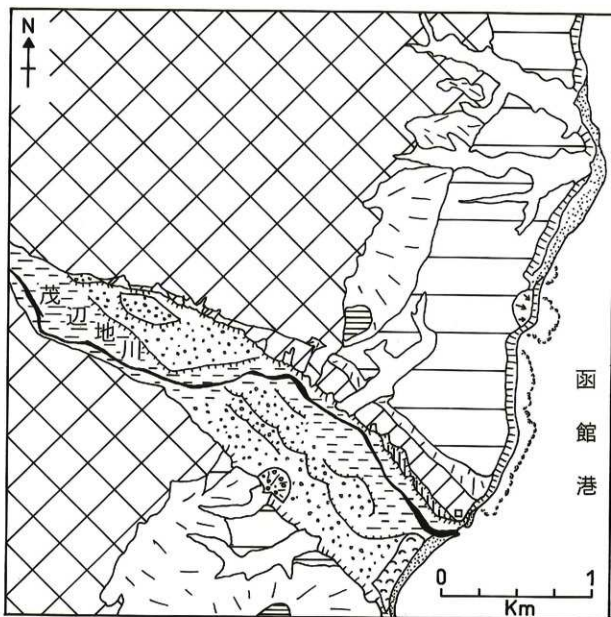
番号	遺跡名	時代	所在地	番号	遺跡名	時代	所在地
36	矢不來館跡	中世	矢不來382-1ほか	53	石倉野2遺跡	縄文時代 早期・後期	三ツ石325ほか
37	飯沼4遺跡	縄文時代 中期～後期	飯沼224-3, 225-1	54	石倉野3遺跡	縄文時代 後期	三ツ石328
38	館野3遺跡	縄文時代 中期	館野105	55	矢不來3遺跡	縄文時代	矢不來42-1ほか
39	飯沼4遺跡	縄文時代 中期～後期	飯沼194-2	56	柳沢1遺跡	縄文時代 後期～晩期	柳沢223ほか
40	飯沼8遺跡	縄文時代 後期	飯沼201-1	57	柳沢2遺跡	縄文時代 中期～晩期	柳沢13-2
41	当別2遺跡	縄文時代 早期～前期	当別424-1ほか	58	矢不來4遺跡	縄文時代 中期	矢不來385, 396ほか
42	当別川左岸遺跡	縄文時代 後期	当別653-2ほか	59	矢不來5遺跡	縄文時代 後期	矢不來292
43	当別3遺跡	縄文時代 前期～後期・縄文	当別461-2	60	矢不來6遺跡	縄文時代	矢不來269, 270ほか
44	当別4遺跡	縄文時代 早期	当別424-1	61	矢不來合葬墓2	近世	矢不來286
45	茂辺地3遺跡	縄文時代	茂辺地757-1ほか	62	矢不來7遺跡	縄文時代 中期～縄文時代	矢不來422-1ほか
46	富川館跡	近世	館野4-4	63	三ツ石2遺跡	縄文時代 中期～縄文時代	三ツ石198-1, 2ほか
47	矢不來2遺跡	縄文時代 前期～後期・縄文時代	矢不來72-1	64	野崎3遺跡	縄文時代	野崎104-1
48	矢不來天満宮跡	中世～近世	矢不來71-1ほか	65	野崎4遺跡	縄文時代	野崎178-1, 2ほか
49	館野4遺跡	縄文時代 中期～後期	館野17-1	66	野崎5遺跡	縄文時代	野崎115-1, 116-1
50	フコヤ野3遺跡	縄文時代 前期	三ツ石309-3	67	野崎6遺跡	縄文時代	野崎155ほか
51	フコヤ野3遺跡	縄文時代 晩期	三ツ石309-6, 7	68	当別5遺跡	縄文時代	当別755-1
52	石倉野1遺跡	縄文時代 晩期	三ツ石362ほか	69	柳沢3遺跡	縄文時代 中期～後期	三好34

2 遺跡周辺の地形

図Ⅱ-4に遺跡周辺の地形分類図を示す。大局的には、現海岸線に平行的に海成段丘が発達し、その背後に丘陵が発達している。海蝕崖を除くと露頭はほとんどなく、地形の構成物を観察することは難しい。地形分類は、空中写真判読、地形図の読図、五日間程度の現地調査によっている。

1. 丘陵地 丘頂標高150～200mで、狭長な谷で開析されている。茂辺地川左岸域では丘頂標高がやや高くなり、250～300mを示すものがある。
2. 緩斜面 丘陵地の縁辺と段丘面Ⅰの縁辺で、標高70～100mに発達する比較的緩傾斜の地形である。開析の進んだ段丘面の可能性があるが詳細は不明である。
3. 段丘面Ⅰ 標高70～80mの平坦面で、発達が悪い。茂辺地川右岸のこの面は、上に凸を示し、周辺は広い緩斜面が発達している。
4. 段丘面Ⅱ 標高50～70mに分布する海成段丘で、遺跡周辺では最も発達の良い段丘面である。この面の段丘崖付近に地すべり(14)が認められる。
5. 段丘面Ⅲ 標高30～40mに分布する河成段丘で、茂辺地川左岸に発達する。茂別遺跡はこの面の河口部に立地している。この面と段丘面Ⅱとの間には緩斜面が発達している。発掘地区付近の工事法面では、泥岩を基盤として層厚2m以上の礫層を認めることができる。礫は砂岩、頁岩、チャートが主体で、粒径1～10cmの扁平なものが多い。礫層の直上には層厚約1.5mのローム層が発達し、ローム層中に礫が凍上しているのが認められる。
6. 段丘面Ⅳ 標高20～30mに分布する河成段丘で、茂辺地川左岸に認められる。
7. 段丘面Ⅴ 段丘面Ⅳより低位の段丘群を一括している。茂辺地川に沿って発達する河成段丘で、比高の小さな二～三面の段丘から成る。
8. 段丘崖 通常急崖をなすが、段丘面Ⅱと段丘面Ⅲとの境のように段丘崖が不明瞭で、緩斜面となっていることもある。
9. 沖積堆 茂辺地川右岸で、谷の出口に認められる錐状の高まり、他の谷の出口では発達が悪い。
10. 氾濫原 茂辺地川沿いに発達する。
11. 浜堤(?) 茂辺地川の河口で、現海岸線に平行な内陸側の高まりである。
12. 砂浜 茂辺地川河口付近と河口の北北東部海岸に分布する。
13. 海蝕棚 茂辺地川河口から北東～北北東部海岸に分布する。
15. 未分類

(花岡正光)



図Ⅱ-4 遺跡周辺の地形分類図

Ⅲ Ⅲ層中・下部の調査

1 概要

検出された遺構には、住居跡、住居跡様遺構、壕の一部、土墳墓、土墳、粘土採掘跡と考えられる土壌群、集石、焼土がある。これらの遺構は、壕の一部を除いて主に茂辺地川に面した台地の縁辺部から斜面部にかけて集中している。

出土した遺物には土器、石器、土・石製品がある。土器には縄文時代早期から後期まで各時期のものが出土している。このうち前期の円筒土器下層式と中期の円筒土器上層式が多い。石器には石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、たたき石、すり石等がある。土・石製品には円盤状土製品、三角形土製品、三角形礫石器、青竜刀形石器等がある。

(佐藤和雄)

2 遺構

(1) 住居跡

H-6・7・8 (図Ⅲ-1)

台地の平坦面に位置する。L-22区をV層上面まで掘り下げたところ、焼土が1カ所検出された。周囲を精査した結果、暗褐色土の落ち込みが広い範囲で確認され、Mラインの土層断面とそれに直交するトレンチから、大型の遺構3基と土壌が重複していることがわかった。大型の遺構については新しい順にH-6、H-7、H-8とし、重複している他の土壌とあわせて順次調査を進めた。はじめに検出された焼土はH-6に伴うものである。

H-6

位置 L-21・22、M-21・22 規模 $5.04 \times (1.78) / 4.38 \times (1.62) / 0.20$

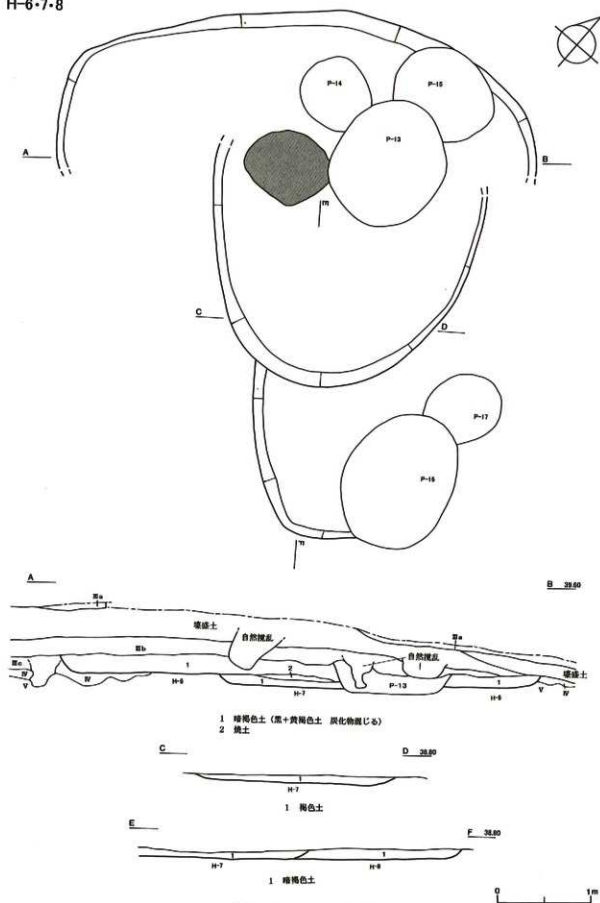
特徴 平面形は長円形に近いと推定されるが、本住居跡の南東側半分、L-21・22区においては、床面まで掘り下げた段階で遺構とわかったため、壁は検出できなかった。床は平坦で、中央には炉跡と考えられる焼土がある。柱穴は確認できなかった。H-7・8より新しく、P-13・14・15よりも古い。構築時期は床面出土の遺物から、縄文時代前期初頭、Ⅱ群A類土器の頃と考えられる。

遺物 (図Ⅲ-2・3)

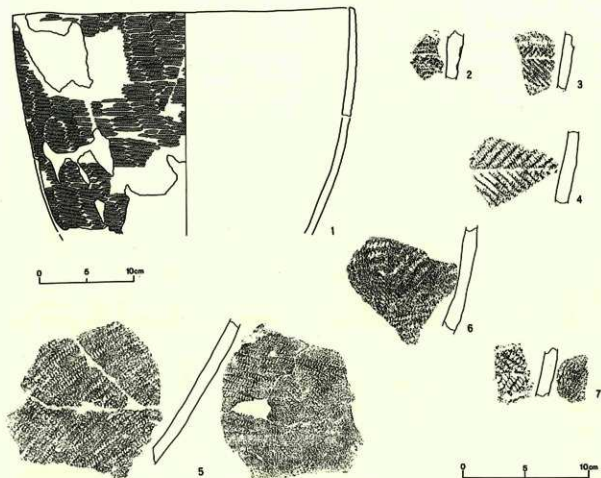
土器: 床面からⅡ群A類土器(1・2)、覆土からⅡ群A類土器(5~7)、Ⅱ群B類土器が出土している。1は縄文式系統のもので、底部を欠いている。口縁はやや開く。器表面には全面にLRの横走る縄文が施されている。縄文の節は磨り消されていない。口唇断面は角形に近く、口唇上及び内面は丁寧になで調整されている。胎土には繊維とともに細砂粒が多く含まれている。2は3本組み紐の押捺されたもので、H-7出土の資料(4)と同一個体と考えられる。胎土には繊維が含まれている。3、4、7は整った斜行縄文が施されたもので、胎土には繊維が含まれている。5、6はLRの縄文が施文方向をかえてまばらに施されたもの。胎土には繊維が多量に含まれている。5には内面にも縄文が施されている。

(工藤研治)

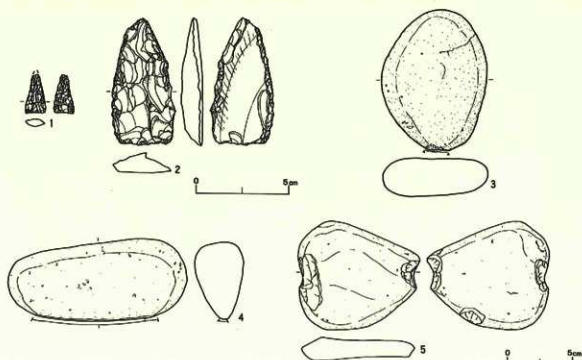
H-6・7・8



図Ⅲ-1 H-6・7・8



図Ⅲ-2 H-6 出土の土器



図Ⅲ-3 H-6 出土の石器

石 器：焼土中からすり石（４）、剥片等が出土し、覆土から石鏃（１）、両面調整石器、篋状石器（２）、たたき石（３）、石鏃（５）等が出土している。１は無茎凹基の石鏃。基部が浅く湾曲する。表面と裏面の左側縁に再加工が認められる。２は篋状石器。左右非対称で半両面加工である。全体の加工は粗く、刃部は直線状で片刃である。３はたたき石。扁平な円礫を素材とし、下端部にたたき痕がある。被熱により両面共に変色し、表面には黒色付着物が認められる。４はすり石。断面は三角形状で、側縁に軽微なすり面が認められる。５は石鏃。長軸方向の両端に両面からの加工で抉りを作り出している。下部の剥離痕はやや磨滅している。

（広田良成）

H-7

位 置 L-22、M-22

規 模 $(2.66) \times 2.76 / (2.44) \times 2.53 / 0.09$

特 徴 H-6の調査過程で検出された。平面形は長円形に近い形と推定されるが、北半は壁を確認できなかった。炉跡や柱穴は確認できなかった。H-6、P-13よりも古く、H-8よりも新しい。構築時期は床面出土の土器から縄文時代早期、I群B類土器の時期の可能性がある。

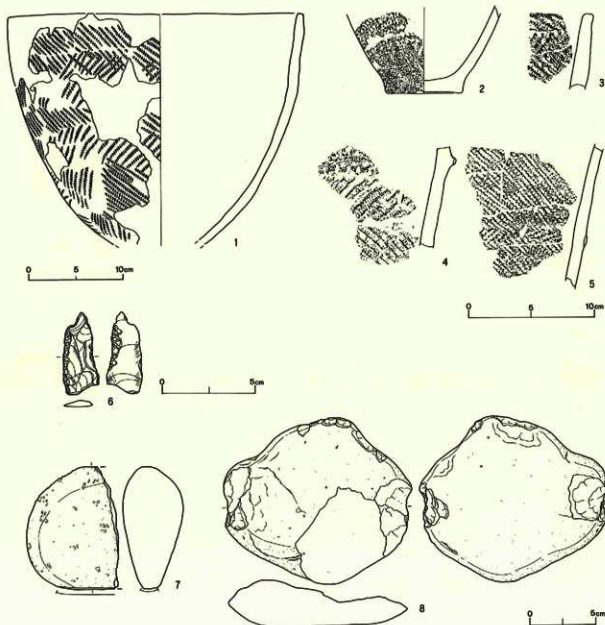
遺 物（図Ⅲ-4）

土 器：床面からI群B類土器（２）、覆土からI群B類土器（２）、II群A類土器（３・４）、IV群A類土器（５）が出土している。１は口径と器高の比が１：１に近い尖底土器。口縁部は少し外に開く。器面にはRLとLRの原体で羽状縄文が施されている。縄文施文後から磨かれていて節が少しつぶれている。胎土には多量の繊維が含まれている。２は縄文の施された平底土器の底部。胎土には繊維が含まれている。４・５は整った羽状縄文が施されたもの。胎土には繊維が含まれている。器質は緻密で硬い。４は口縁部に近い破片で、刻み目の付いた細い隆起帯がめぐる。隆起帯の上位には無文地に３本組み紐の圧痕文が施されている。５はIV群A類土器の胴部破片。

（工藤研治）

石 器：覆土からつまみ付きナイフ（６）、Rフレイク、剥片、すり石（７）、石鏃（８）、礫・礫片が出土している。６は周辺加工のつまみ付きナイフ。縦長剥片を素材とし、素材端部につまみを作り出したもの。下端部に打面と自然面を残す。背面左側縁に刃部が形成され、腹面左側縁の加工は整形のためと思われる。７はすり石。表面右部分と裏面右上部が欠失し、断面形は上部が幅広で下部がすぼまる。全体的に被熱による変色が認められ、被熱による欠損の可能性もある。側縁部にすり面を形成する。すり面端部に軽微な敲打痕が残っており、敲打により機能部を作り出した後、すっていると考えられる。８は石鏃。長軸方向の両端に抉りを入れている。全体的に被熱のため変色しており、表面右下の欠失はそれによるものと思われる。

（広田良成）



図Ⅲ-4 H-7出土の遺物

H-8

位置 L-22

規模 $(1.58) \times (1.58) / (1.52) \times (1.32) / 0.11$

特徴 H-6の調査過程でH-7とともに検出された。壁の一部が確認されただけで、平面形は不明。大型の遺構の一部と考えられるため、便宜的に住居跡として報告する。炉跡、柱穴は確認されなかった。H-7に切られている。覆土からⅡ群A類土器、剥片、礫石器片が出土した。

(工藤研治)

H-13 (図Ⅲ-5)

位置 S-16

規模 $2.20 \times 1.70 / 1.96 \times 1.57 / 0.17$

特徴 台地の平坦面にある。Ⅲ層上面でⅡ層の火山灰が落ち込んでいるのを確認した。トレンチを掘って調査したところ、土壌と住居跡、2基の遺構が重複しているのが分かった。2基のうち新しいほうの遺構をP-37、古いほうの遺構をH-13とした。H-13の平面形は不整ではあるが、卵形に近い形を呈する。長軸方向は、ほぼ東西である。床には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。壁際の床面付近から炭化物や焼土がまとめて検出された。床面の中央部から西寄りの位置には径約30cm×40cmの浅いピットがある。ピットの覆土には炭化物が少し混じっていた。焼土は検出されなかったが、位置から判断して炉跡の可能性はある。柱穴は検出されなかった。

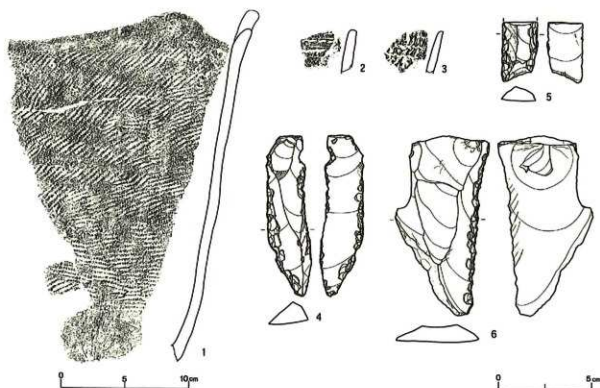
遺物 (図Ⅲ-6)

土器：床面からⅡ群、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類(1・2)、覆土からⅡ群B類(3)、Ⅱ群、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類、Ⅵ群が出土した。1は口縁部に山形の突起があり、口唇断面は丸みを帯びる。器面上半にはLRの原体で斜行縄文、下半には同じ原体で横走ぎみの縄文が施されている。口唇と内面は丁寧に調整されている。2は無文地に細い沈線文が施された口縁部の小片である。3は1段の原体の縄線文が施されている。

(工藤研治)

石器：床面から剥片、礫・礫片、覆土から石槍、つまみ付きナイフ(4)、スクレイパー(5・6)、剥片、礫・礫片が出土している。4はつまみ付きナイフ。背面左側縁に両面から刃部を作り出す。背面右側縁にも不規則な剥離痕が認められる。挟りの加工は丁寧である。5、6はスクレイパー。5は上半部を欠失し、両側縁に刃部を作り出す。下端部にも微細な剥離痕が認められる。表面に自然面を残す。6は上端に打点と打面を残し、背面左下に自然面を残す。背面右側縁に直線的な刃部が形成され、刃部側面は打面付近で素材の形を残し、湾曲する。

(広田良成)



図Ⅲ-6 H-13出土の遺物

H-14 (図Ⅲ-7)

位置 Q-12・13, R-12・13

規模 $(2.32) \times (2.10) / (2.13) \times (1.92) / 0.67$

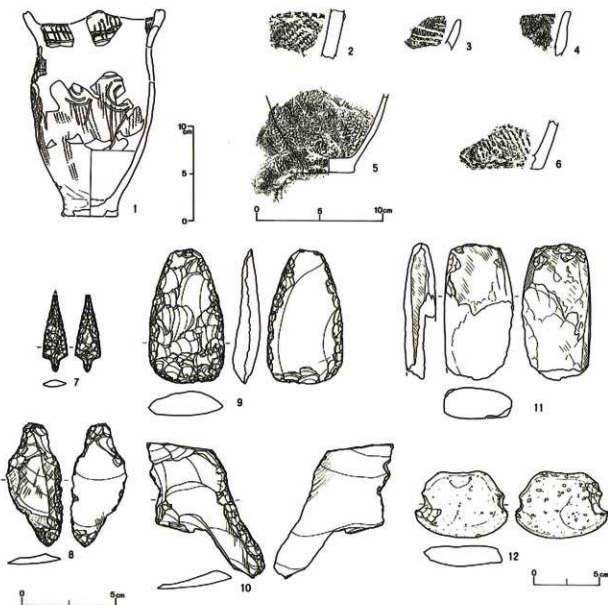
特徴 茂辺地川に面した斜面にある。Ⅲ層上部で検出されたX-18、X-22の調査過程で遺構の存在を確認した。多数の遺構が重複しているため、全容は明らかでないが、平面形は隅丸方形に近いと推定される。床には少し凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ちあがる。床面近くから炭化材がまとまって検出された。床の中央部には炉跡とみられる焼土が1か所ある。床の西隅から柱穴と考えられる小ビットが1か所検出された。床面出土の遺物からⅢ群B類の大安在B式の時期の遺構と考えられる。

遺物 (図Ⅲ-8)

土器：床面及び床直上からⅢ群B類土器（1・5）、覆土からⅡ群B類土器（6）、Ⅲ群A類土器、Ⅲ群B類土器（3）、Ⅳ群A類土器（2・4）、Ⅵ群土器が出土した。1は口縁部に4か所の山形突起のあるもので、口縁部は外反している。体部には撚糸文の地に断面の丸い工具を用いた円形の沈線文、口縁部には無文地に鋭い工具で縦横に細い沈線文が施されている。口唇には刻み目が付けられている。胎土には繊維が含まれている。大安在B式に相当するものである。5は縄文の施された底部。2には刻み目のある細い隆起帯が付いている。3には撚糸文の地に細い沈線文が施されている。4は無文。6は撚糸文の施された底部。

(工藤研治)

石器：床面からつまみ付きナイフ（8）、スクレイパー、剥片、覆土から石鏃（7）、鏃状石器（9）、スクレイパー（10）、剥片、磨製石斧（11）、台石・石皿、石錘（12）、石製品剥片等が出土している。7は有茎凸基の石鏃。先端が欠失し、裏面に素材面を残す。薄身で全体に丁寧な加工が施される。8



図Ⅲ-8 H-14出土の遺物

はつまみ付きナイフ。刃部は背面右側縁に作り出され、左側縁にも微細な剥離痕がある。9は筒状石器。横長剥片素材で側縁は外湾し、厚さは刃部付近で厚くなる。背面上端以外の3辺は丁寧な加工が施される。10はスクレイパー。背面右側縁にやや内湾する刃部が作り出される。腹面右側縁には挟り部が2つ作り出され、鋸歯状を呈する。11は小形の磨製石斧。著しく欠失している。残存部は主面、側面共に斜方向に丁寧に研磨されている。12は石錘。

(広田良成)

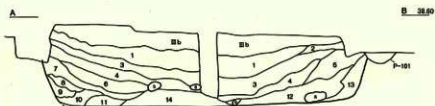
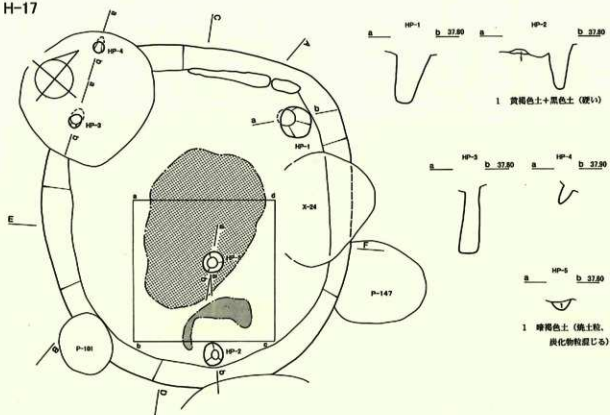
H-17 (図Ⅲ-9・10)

位置 Q-15・16、R-15・16

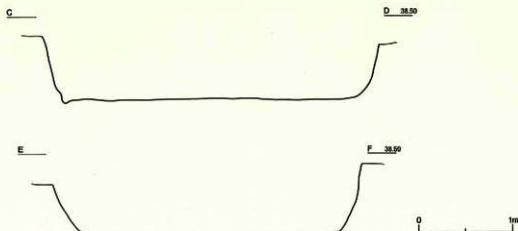
規模 $3.60 \times (3.30) / 3.16 \times 2.72 / 0.78$

特徴 台地の平坦面にある。Ⅲ層上部で検出されたX-21、X-24の調査過程で確認された。Ⅲb

H-17



- 1 褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒色土
- 4 黒褐色土 (黄褐色土粒混じる)
- 5 褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 6 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 7 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 8 暗褐色土 (黄褐色土ブロック混じる)
- 9 暗褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 10 暗黄褐色土 (黒色土+黄褐色土)
- 11 褐色土 (黄褐色土ブロック混じる)
- 12 暗黄褐色土 (黄褐色土粒多く混じる)
- 13 黒褐色土 (径2~3cmの黄褐色土ブロック混じる)
- 14 暗黄褐色土 (黒色土+黄褐色土) (5~14には炭化物が混じる)



図Ⅲ-9 H-17(1)

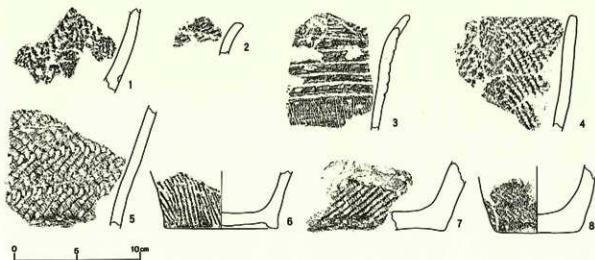
層から掘り込まれている。平面形は楕円形の長軸方向の一端をまっすぐ断ち落としたような形で、北西側が直線的で南東側が丸みを帯びる。床は平坦で、壁は急に立ち上がる。床面北西側の壁際では浅い溝が部分的に検出された。床の中央部は非常に硬く締まっていて、部分的に焼けている。床の硬く締まっている範囲内には径約20cmの浅い小ビットが1か所あり（HP-5）、覆土には焼土や炭化物の粒が多く混じっていた。小さいけれども位置からみて炉跡の可能性がある。柱穴と考えられる小ビットは4か所検出された（HP-1～4）。このうちHP-2は、床に貼り付けられた厚さ2cm～5cm、幅5cm～20cmの黄褐色土の高まりで囲まれている。覆土8層以下には炭化物が多く混じり、壁際では炭化材や焼土が多く検出された。焼失した住居の可能性がある。構築時期は明らかではないが、平面形から縄文時代中期の可能性が高いと考えられる。

遺物（図Ⅲ-11・12）

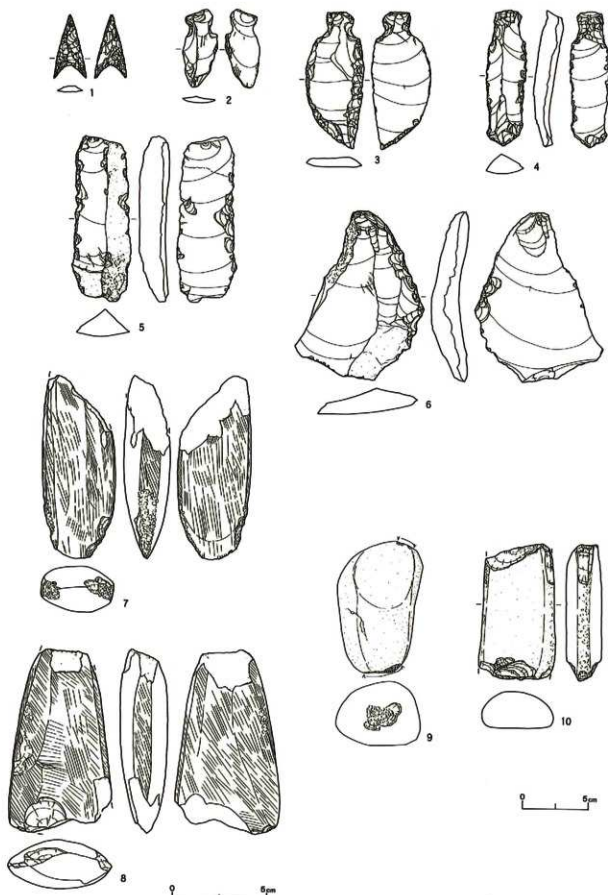
土器：床面からⅡ群B類、Ⅲ群A類（5）、Ⅲ群（1）、覆土からⅠ群B類、Ⅱ群B類（2・3）、Ⅱ群（4）、Ⅲ群、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類（6）、Ⅳ群A類（7・8）、Ⅴ群が出土した。1は縄文の施された胴部片。縄文地に刺突文が施されている。所属時期は明らかでないが、仮にⅢ群に含めておく。2は無文地に縄線文が施されたもの。3は山形口縁のある破片で、口縁部には無文地に縄線文が施され、胴部には網目状の撫糸文が施されている。5には結束羽状縄文が施されている。6は撫糸文が施された底部。7・8は縄文の施された底部。

（工藤研治）

石器：床面からつまみ付きナイフ（4）、両面調整石器、Rフレイク、石核、剥片、磨製石斧（7）、石皿・台石、礫・礫片、覆土からは石鏃（1）、つまみ付きナイフ（2・3）、両面調整石器、スクレイパー（5・6）、Rフレイク、石核、剥片、磨製石斧（8）、磨製石器剥片、たたき石（9・10）、砥石、礫・礫片が出土している。1は無茎凹基の石鏃。基部の挟りは深い。裏面に素材面を一部残すが、丁寧な作りである。2～4はつまみ付きナイフ。2は薄身で、挟り部と背面の左側縁上半部のみ加工が施される。3は周辺加工のもので、腹面は挟り部と末端部に加工が施される。素材の打面は自然面である。4は断面が三角形状を呈する。挟り部は浅いが丁寧に作り出され、側縁は背、腹面共に非連続な剥離が多く、使用痕の可能性ある。5、6はスクレイパー。5は縦長剥片素材で、打面は自然面である。1側縁に両面から刃部を作り出す。背面の加工は刃部を直線状に整形するためのものと考えられる。6は末端部が折れている。背面左側縁は被熱が認められる。右側縁に外湾する刃部が



図Ⅲ-11 H-17出土の土器



図Ⅲ-12 H-17出土の石器

作り出されるが、中央付近の屈曲部より上部では直線状、下部では鋸歯状を呈する。7、8は磨製石斧。7は基部を欠失する。刃部も破損しているが、残存している部分は両刃で刃縁は丸みを帯びている。刃部の破損部にはたたき痕が認められ、刃部再生の意図が伺える。鑄は明瞭ではない。8は刃部と基部を大きく欠失する。研磨は全体的に丁寧だが、部分的に製作段階の剥離痕もしくはたたき痕が残る。主面に軽微な稜線が数条認められる。9、10はたたき石。9は両端にたたき痕を有する。下端のたたき痕は細かい敲打によるものと、大きな剥離によるたたき痕が認められる。10の両端の使用痕は打ち欠きによるもので、上端部の剥離の後に細かいたたき痕が認められる。側面には浅く細かいたたき痕が認められる。たたき石ではなく石斧の破損品もしくは両極石器的に使用された石器の可能性はある。

(広田良成)

H-10 (図Ⅲ-13・14)

位置 R-20・21

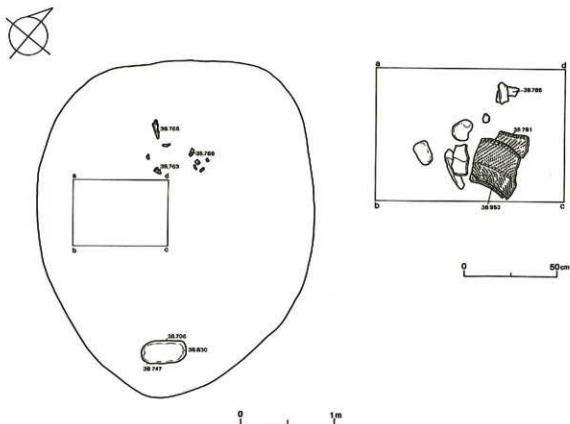
規模 3.52×2.90/3.04×2.27/0.52

特徴 壕の盛土を調査した後、その下位のⅢb層で暗褐色を呈する壕の盛土が円形に落ち込んでいるのを確認した。あらかじめ残していたベルトに沿ってトレンチを掘ったところ住居跡と分かった。平面形は卵形。長軸方向は北西-南東であり、南東側の先が細くなっている。床面は平坦で、壁は急に立ち上がる。床の中央では炉跡が2か所検出された(HF-3・4)。2か所とも浅く窪んでおり、底面は焼けて赤化している。焼土や灰は検出されなかった。掻き出されている可能性がある。床面西端では径約60×80cmのピットが検出された(HP-1)。このピットは小ピットが2個重複している可能性もあるが、現地ではこの点を確認できなかった。柱穴は検出されなかった。HF-4付近の床面では炭化材がややまとまって検出されている。焼失家屋の可能性はある。床面南東の先端部に近いところから約25×50cmの大型の礫が出土している。覆土は暗黄褐色若しくは暗褐色を呈する壕の盛土(覆土5・6層)が、住居跡の北東側半分で厚く堆積し、床面の一部を直接覆っている。南西側では明瞭な壕の盛土は認められないが、類似する色調の土層(覆土7層)が床面を覆っている。覆土7層からはIV群A類土器の大型破片が3枚重なって出土した。いずれも土器の表面を上に向け、口縁部の位置が逆になるように互い違いに重なっていた。堅穴の廃棄あるいは壕の構築等に関する何らかの儀礼に由来するものであろうか。住居の構築時期は明らかでないが、床面出土の遺物や住居跡の平面形・構造からみて、Ⅲ群B類の煉瓦台式からIV群A類の余市式土器の時期の間、縄文時代中期末から後期初頭と考えられる。

当初のトレンチ調査では、覆土から2か所の焼土が検出されており、中央部の窪地で検出されたものをHF-1、覆土8層中で検出されたものをHF-2としている。HF-1は堅穴の窪地を利用した焚き火跡と考えられる。HF-2は焚き火跡ではなく、二次的に堆積したものである。HF-1は上位にある覆土1・2層及びⅢa層下部からIV群A類土器が多く出土していることから後期初頭の可能性が高い。HF-1～4及び床面の土壌をフローテーション処理した結果、HF-1からヒエ族の種子等が出土した(Ⅷ-4参照)。また、HF-1出土のヒエ族の種子と床面で検出された炭化材については年代測定を行っている(Ⅷ-8参照)。

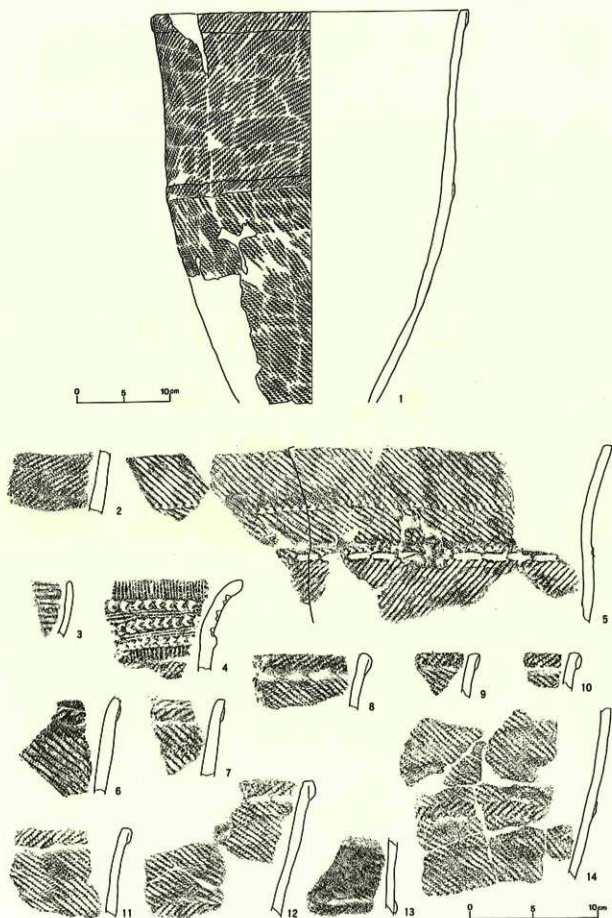
遺物

土器 床面からⅡ群B類、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、IV群A類(2)、覆土からI群B類(3)、Ⅱ群A類、Ⅱ群B類、Ⅲ群A類(4・24)、Ⅲ群B類(5)、IV群A類土器(1・6～23)が出土している。2はL Rの縄文が施されたもの。3は中茶路式。4・24は円筒上層b式に相当するもの。4の口縁部には馬蹄形の圧痕文が施されている。24は覆土出土の資料と包含層出土の資料が接合したものである。高さは65cmを超え、全面に結束羽状縄文が施されている。5は煉瓦台式に相当するもので、口縁部が少し外反し、体部と口縁部を画するように短刻線文が施されている。器面の縄文は短刻線文より上位ではR Lの原体を横方向、下位では縦方向に施文されたものである。口唇断面は角型で、口唇と内面は丁寧に調整されている。1は覆土7層から出土した3枚の大型破片から復元したものである。器壁はやや厚手で、厚さにむらがある。口縁部と体部中央に貼付帯が施され、口縁部から体中央の貼付帯上まではL Rの原体で横役に、体下半では同じ原体で縦役に施文している。口唇は角がやや丸みを帯びていて、口唇から内面にかけてで調整されている。8～10は口縁部に貼付帯が施されるもので、器面には原体を縦位、貼付帯上には横位に縄文が施されている。13・14は貼付帯の施された胴部片。14は貼付帯には原体を横位、体部には縦位に縄文が施されている。15～17は口縁部に縄線文が施されたもので、貼付帯の施されたものより薄手である。口唇断面は丸みを帯びる。19は無文で口縁部は折り返されている。20・21は縄文が施されるものである。(工藤研治)

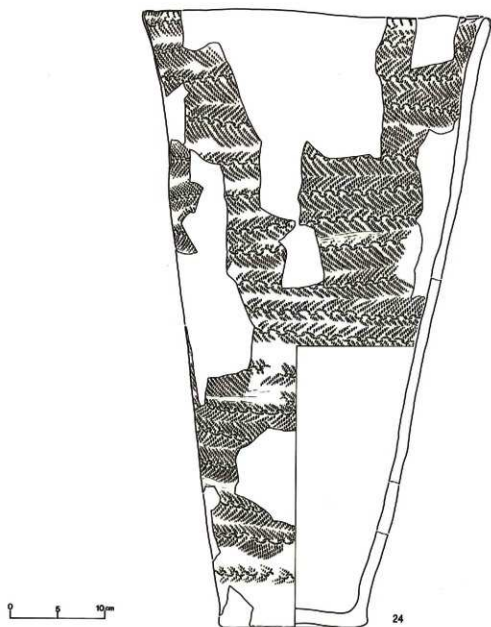
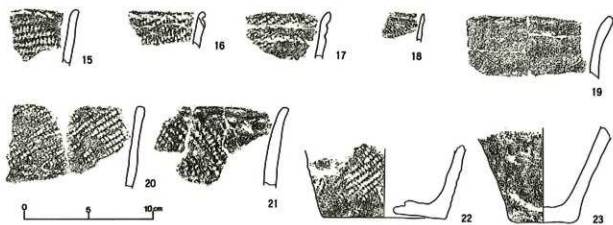


図Ⅲ-14 H-10遺物出土状況

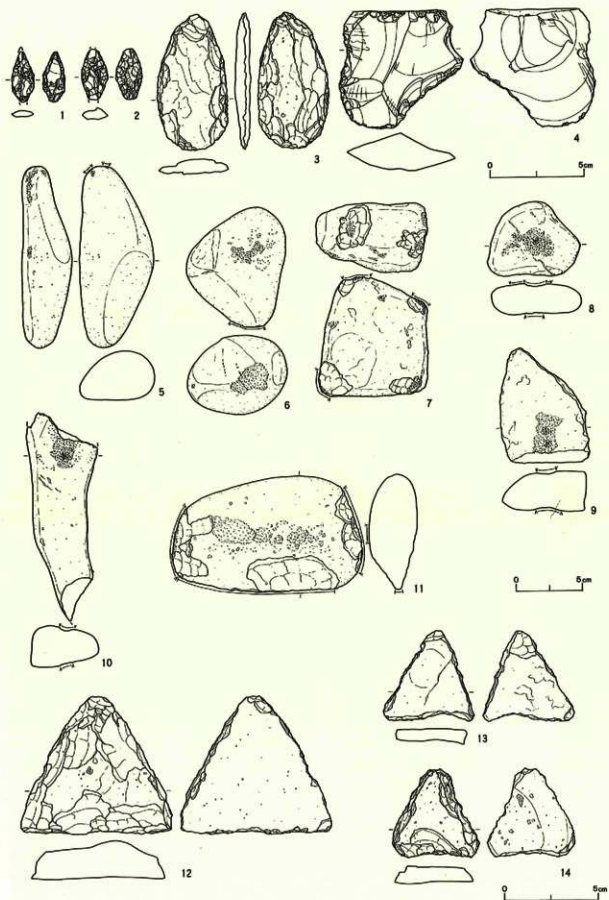
石 器：床面から石鏃（2）、剥片、すり石（11）、礫・礫片、覆土からは石鏃（1）石槍（3）、スクレイパー（4）、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、原石、たたき石（5～10）、礫石器片、礫・礫片、三角形礫石器（12～14）、石製品剥片が出土している。1、2は石鏃で共に先端部及び基部を欠失している。1は有茎凸基で、裏面は周辺加工で素材面を残す。2は菱形を呈する。全体的に厚みがあるが、表面左下部はやや厚めの剥離痕が残る。3は木葉形の石槍。薄手で先端部はやや丸みを帯びる。扁平な礫素材で周辺加工が施され、表、裏面共に自然面を残す。4はスクレイパー。打面部を除く3辺に刃部がある。いずれも背面側に作り出され、右側縁と末端部の刃部の作りは粗雑である。素材の打面は自然面である。5～10はたたき石。5は棒状礫の一端とその周縁付近にたたき痕をもつ。たたき痕は軽微である。6は下端に広めのたたき痕が認められる。たたき痕は細かく凹凸は少ない。7は角礫を素材とし、使用痕は礫の四隅に認められる。たたき痕は大きめの剥離によるものが多く、対象物に対して比較的強くたたいた結果のものと推定される。8は小形の礫にくぼみ状のたたき痕を残すもの。裏面にも浅いたたき痕がわずかに認められる。9、10は両面にくぼみ痕を残すもの。素材の礫は凝灰岩製で脆く、上下は欠失している。10は棒状礫を素材とし、上下を欠失する。裏面のたたき痕は浅い。11はすり石。いわゆる扁平打製石器で両面からの周辺加工により上面以外の3辺を整形し、側縁に細いすり面を作り出している。表面には浅く細かい敲打によるあばた状のたたき痕がある。12～14は三角形礫石器。いずれも扁平な礫素材で片面からの周辺加工により三角形に整形し、両面に素材面を大きく残す。12は大形で比較的整った三角形を呈する。13、14はやや不整で角が丸みを帯び、1辺が内湾する。内湾部は1回の大きな剥離により作り出している。（広田良成）



図Ⅲ-15 H-10出土の土器(1)



図Ⅲ-16 H-10出土の土器(2)



図Ⅲ-17 H-10出土の石器・石製品

H-11 (図Ⅲ-18~20)

位置 P・Q-17・18、R-18 規模 6.52×5.28/6.11×4.98/0.58

特徴 調査区北側の平坦面に位置する。I層除去後、Ⅲ層上面に直径2m程のⅡ層(B-Tm)の落ち込みが確認された。遺構の存在が予想されたため十字にベルトを設定し、土層を確認しながら調査を進めた。壁の立ち上がりや炉が確認されたため住居と認定された。平面形は不整形である。壁は斜めに立ち上がる。床面は平坦であるが一部に凹凸がある。柱穴とみられる小ピットは19ヶ所箇所確認された。炉は3ヶ所確認された(HF-1・2・3)。炉は長軸上に並ぶもので、HF-3には石組みの礫が一部残っていた。HF-1は暗黄褐色粘土で覆われており、粘土上からHP-14に切られている。炉を移し替えた後、粘土を貼り、柱を建てた可能性がある。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭とみられる。

(愛場 和人)

遺物 (図Ⅲ-21~23)

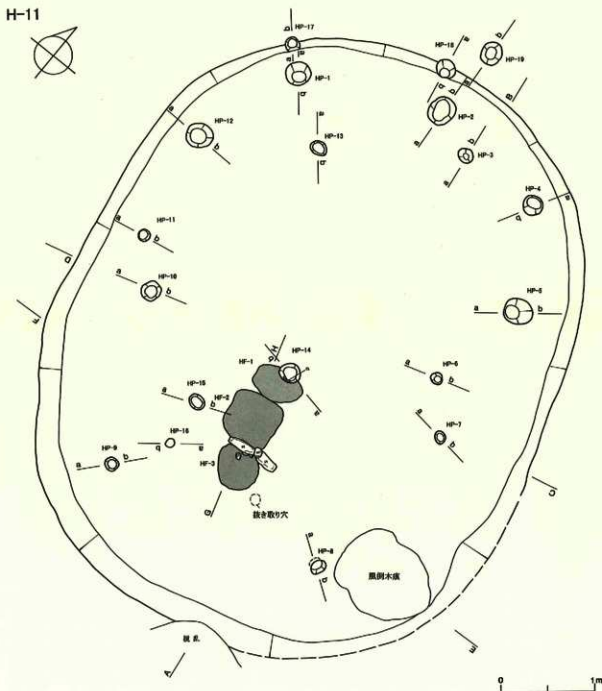
土器: 床面からⅡ群B類、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類、覆土からⅠ群A類(1)Ⅰ群B類、Ⅱ群A類、Ⅱ群B類、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類(2~4)、Ⅳ群A類(6~11)、Ⅵ群が出土している。1は図Ⅲ-145-1と同一個体。2は撚糸文の施されたもの。3・4は斜行縄文の施されたもので、口唇断面は丸みを帯びる。口唇から内面にかけて磨かれている。5はRLとLRの原体で羽状縄文が施された厚手の土器である。6~7は口縁部に貼付帯が施されたもので、貼付帯上は横位、体部は縦位に施文されている。9は口縁部がやや内傾するもので口唇断面は丸みを帯びる。貼付帯はないけれども、口縁部ではLRの原体を横位に、体部では縦位に施文されている。10、11は無文の土器。器面は粗く調整されている。

(工藤研治)

石器: 床面から剥片、石皿・台石、加工痕跡、礫石器片、礫・礫片、三角形礫石器(17)、覆土から石錐(1・2)、つまみ付きナイフ(3)、両面調整石器(4)、スクレイパー(5・6)、剥片石器片、石核(7)、剥片、磨製石斧(8)、たたき石(9)、すり石(9・10)砥石(12)、石皿・台石(13~15)、加工痕跡、礫石器片、礫・礫片、三角形礫石器(16・17)、円形礫石器、石製品剥片、円盤状土製品(19)、三角形土製品(18)が出土している。1、2は石錐。1は素材の末端部の形状を利用して棒状の小さな尖頭部を作り出している。2は横長剥片を素材とする。2側縁に両面から周辺加工を施し尖頭部を作り出す。腹面側の右側面に自然面を残す。3はつまみ付きナイフ。縦長剥片素材で、素材の末端は石核の底面まで達し分厚くなっている。背面左側縁に急角度の刃部を作り出す。右側縁には微細な剥離痕が認められ、切る、掻くといった用途が推定される。4は両面調整石器。横長剥片素材で両面に素材面を残す。左右は非対称で、下半部に柄部が作り出される。先端部と基部をわずかに欠失する。加工は全体的に粗めで、刃縁は鋸歯状を呈し、刃部は両面からの加工で作られている。5、6はスクレイパー。背面に大きく自然面が残る。刃部は背面末端部に作り出される。鋸歯状を呈し、微細な剥離痕も認められる。腹面末端部にもわずかに剥離痕がある。6は背面、腹面共に焼けはじけが認められる。2側縁に刃部をもち、剥離痕は被熱のため、不整なものが多い。7は石核。表面、裏面共に作業面で、周辺から求心状に剥片を剥離している。打点、作業面共に頻りに移動している。8は小形の磨製石斧。刃部の一部及び基部を欠失している。薄身だが、主面はあまり平坦でなく数面からなる。表、裏面共に部分的に素材面を残すが、主面、側面共に横及び斜方向に丁寧な研磨が施される。両面共に筋はあまり明瞭ではないが、刃部は横方向の研磨により両面から研ぎ出されている。刃部は弱い円刃を呈する。9は円礫素材のたたき石。両面と下端に浅く細かいたたき痕が認められる。たたき痕は表面、下端では散発的だが下端のものはやや深い。10、11はすり石。10は側縁にやや幅広いすり面がある。両端に打ち欠きがあり、石錐に転用されている可能性がある。石質は

多孔質の安山岩。11は左部分を大きく欠失する。残存部では上部以外の2辺は連続した打ち欠きにより機能部を作り出している。すり面は未形成だが、形態の特徴からすり石に含める。12は砥石。両面共によく使い込まれ、裏面は2面からなる。周辺を全て欠損している可能性がある。13、14は台石。13のたたき痕は全体的に弱い。14は散発的にたたき痕があり、平坦面は弱くすり面を形成している。15は石皿。大形礫の自然面のくぼみを利用してすり面を形成している。すりの程度はは軽微である。16、17は三角形礫石器。16は上半部を欠失する。17は加工が粗雑で形状は歪んだ三角形状を呈する。

(広田良成)



図Ⅲ-18 H-11(1)

D 20.50



B 20.50



- 1 礫層土
- 2 礫層土 (2) に比してやや粗るい)
- 3 礫層土 (礫層土が全層に覆じる)
- 4 礫層土 (礫層土が全層に覆じる)
- 5 礫層土
- 6 礫層土 (礫層土が多数に覆じる)
- 7 礫層土 (礫層土が多数に覆じる)
- 8 礫層土 (礫層土が多数に覆じる)
- 9 礫層土

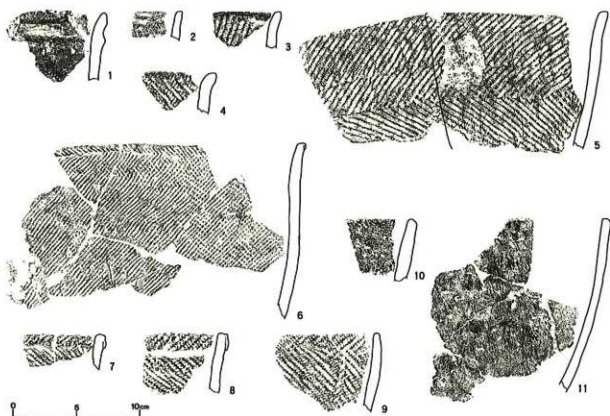
E 20.50



図 19 H-11(2)



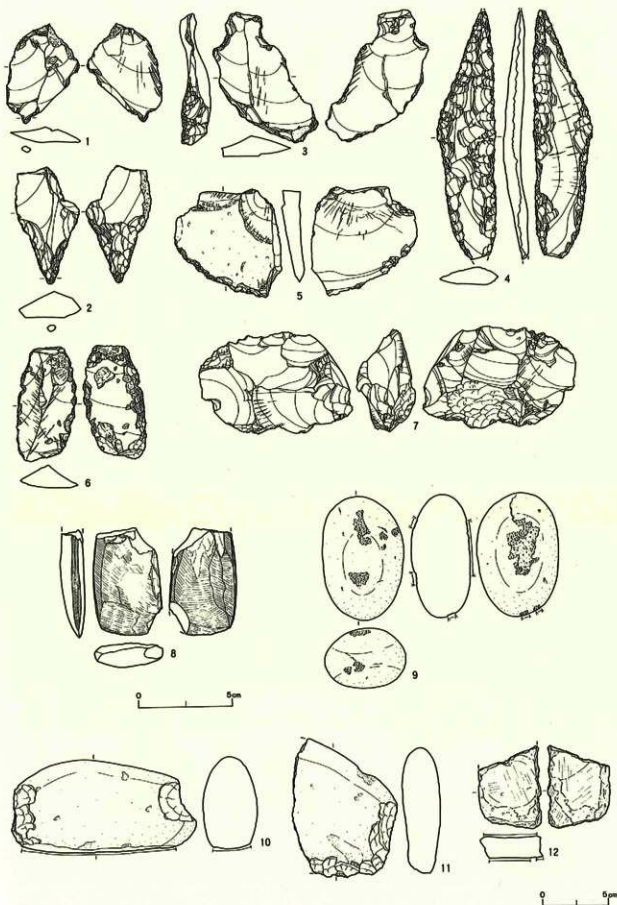
図Ⅲ-20 H-11(3)



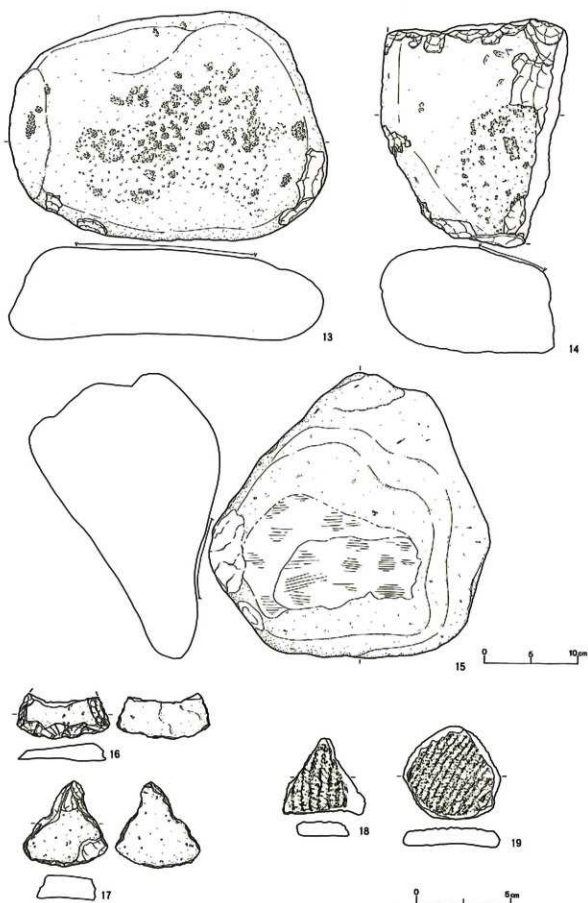
図Ⅲ-21 H-11出土の土器

18は三角形土製品である。IV群A類とみられる土器片を利用している。19は円盤状土製品である。IV群A類とみられる土器片を利用している。

(立田 理)



図Ⅲ-22 H-11出土の石器(1)



図Ⅲ-23 H-11出土の石器(2)・石製品・土製品

H-12(図Ⅲ-24・25)

位置 S・T-16・17

規模 (3.58)×4.80/3.50×4.52/0.90

特徴 調査区北西部の台地縁部で検出され、北西側約半分は調査区外に広がっている。Ⅲ層上面で火山灰の落ち込みとして確認された。H-12の覆土上面で、堅穴の窪地を利用したと考えられる縄文時代の大形の焼土(F-68)が検出されている。F-68の調査後、遺構の重複関係を想定しトレンチ調査を行った。その結果H-12が住居跡であること、土層観察からP-34と重複関係にありP-34より古いことが判明した。

遺構の掘り込み面はⅢ層中部である。平面形は調査終了部分については東西にやや長い楕円形を呈する。全体の形状は、同じⅣ群A類期のH-11等の例から、卵形を呈するものと推定される。東壁の一部がP-34構築時に壊されている。本住居跡は掘り込みが深く、覆土はレンズ状に堆積し全体的に硬い。壁の立上りは調査終了部分では、南側がやや緩く、他は急である。床面は全体的に小さい凹凸があり、堅く締まっている。中央からやや南東寄りの位置に石囲い炉が検出された。炉は深い掘り込みを有し、焼土は薄い。石囲いは大形の偏平礫と小形の棒状礫からなる。部分的に抜き取り痕があるため、全周していた可能性がある。堅穴内でピットは9個検出されている。このうちHP-3～9はその形状、配置から柱穴と考えられる。ただし、いずれも小形で掘り込みは浅く、これらの小ピットだけで上屋を支えたかどうかは不明である。覆土はいずれも黒色土に黄褐色土を混入し、締まりはなく軟かい。HP-1、2は浅い皿状のピットで覆土は硬く締まっている。HP-1は2段構造である。

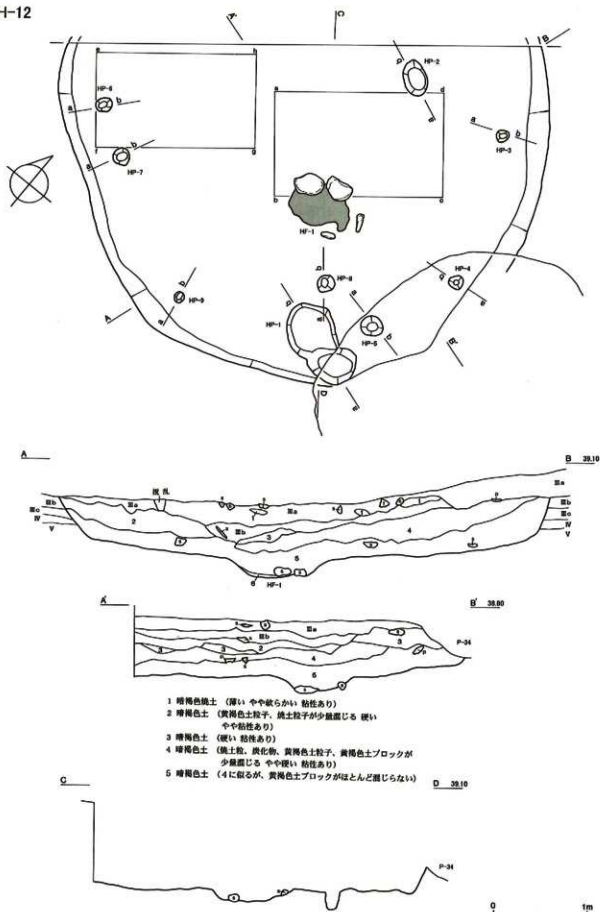
時期 出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

(広田良成)

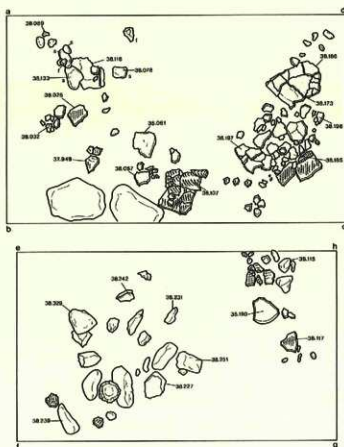
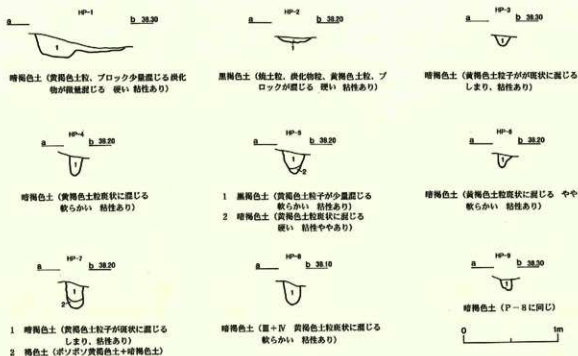
遺物(図Ⅲ-26～34)

土器: 床面からⅠ群A類、Ⅱ群B類、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類(7)、覆土からⅠ群A類、Ⅱ群B類(8、9、52、65)、Ⅲ群A類(10)、Ⅲ群B類(11、12、36、37、53、54)、Ⅳ群A類(1～6、11～35、38～51、55～64、66～74)が出土している。7は床面出土の資料と覆土下部の資料が接合したものである。口縁部を欠く。体部に薄い貼付帯がめぐり貼付帯上では横位、体部では縦位に縄文が施文されている。1～5は覆土各部から出土した資料が接合したものである。1は体部から口縁部にかけて内傾する小型のもの。口縁に幅の狭い縄文が施され、頸部は無文。体部と頸部の境は2段の原体による縄線文で画され、体部には縦位施文の縄文が施されている。2、4は縄文の施された体下半の資料。体部には縦位施文の縄文が施されている。2の底部には横位施文の縄文が施されている。4、5は縄文が施されたやや厚手の土器。3は口縁部が外に開く深鉢で口唇断面は丸みを帯びる。体部にはL Rの原体による縄文が施されている。施文方向は一定しないが、口縁部と底に近い部分には斜行縄文、体部には横走きみの縄文が施されている。5は口縁部がやや内傾する深鉢で体部には整った縦位施文の縄文が施されている。8～35は覆土下部から出土したもの。8は口縁部がやや外反するもので無文地に縄線文が施されている。9は口縁部に燃りの異なる1段の原体を2本並列した縄線文が3段施され、その下位には縄文が施されている。10はサイベ沢Ⅶ式の口縁部。器面には結束羽状縄文が施されている。11、12は口縁部がやや外反するもの。11はL Rの原体で横位に施文されている。12は縦位に施文されている。13、14は貼付帯はないけれども、口縁部に幅の狭い横位施文の縄文が施され、その下位に縦位施文の縄文が施されている。16～27、33は貼付帯が施されたものである。36～51は覆土中部から出土したものである。36は山形突起のある口縁部破片で貼付帯が突起の部分からハの字に下がっている。37は撚糸文の地文に沈線文が施されたものである。38、40は口縁部に無文帯

H-12



図Ⅲ-24 H-12(1)



図Ⅲ-25 H-12(2)

を残すもの。38は口縁を欠くが、体部と口縁部の境に貼付帯が施されている。40には2段の原体による縄線文が施されている。39、41～46は貼付帯が施されたものである。47は縄文のみのもので口縁部には横位施文、体部には縦位施文の縄文が施されている。52～64は覆土上部から出土したもの。52は口縁部に1段の原体の縄線文が施されたものである。54は沈線文が施されたもの。55～60は貼付帯の施されたものである。63、64は磨り消し縄文が施されたものである。65～74は覆土出土のものを一括してとりあげたものである。

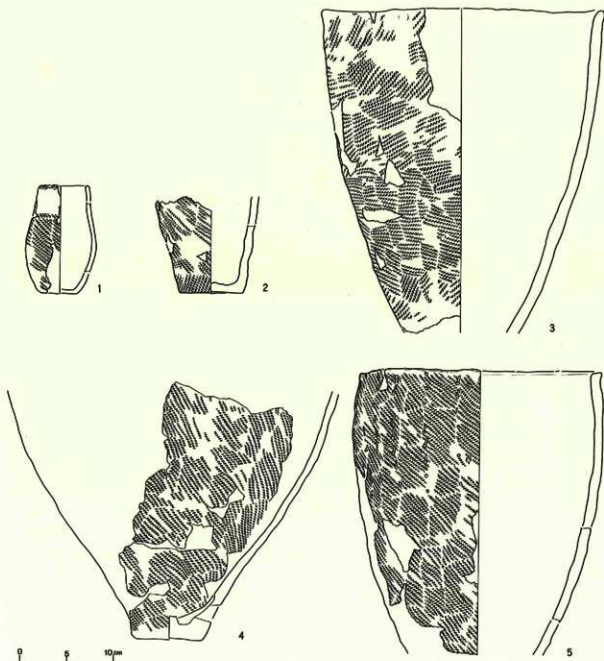
66は口縁部に幅の狭い無文帯があるもので、無文帯の下縁にはLRの原体の縄線文が1条めぐる。体部には縄線文と同じ撚りの原体で縦位に施文した縄文が施されている。67、70、71は縄文のみのもの。

68、69、72、73は貼付帯の施されたもの。74は底面に縄文の施されたものである。

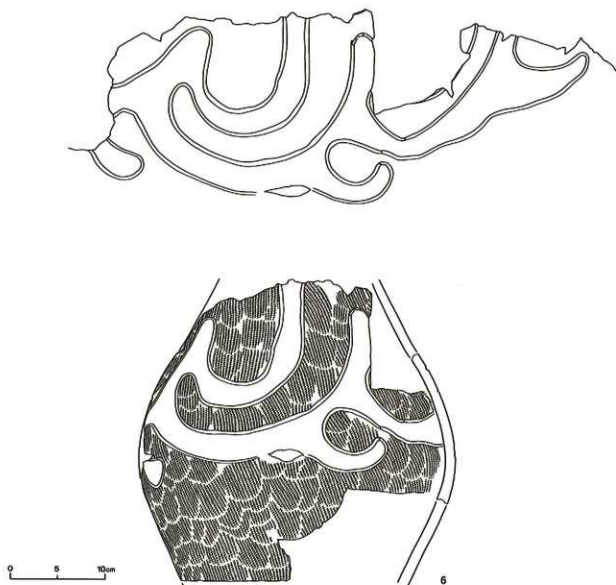
(工藤研治)

石器：床面からRフレイク、剥片、石皿・台石、礫・礫片、三角形土製品、覆土からは石鏃（1～10）、石槍（11）、つまみ付きナイフ（13・14）、両面調整石器（15・16）、篋状石器（12）、スクレイパー（17～22）、鋸歯縁石器、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、原石、磨製石斧（24～26）、磨製石器剥片、磨製石器片、たたき石、すり石、砥石（27）等の礫石器、魚形石器（28）、三角形礫石器（29～32）、青竜刀形石器（33）、円盤状土製品（34・35）、焼成粘土塊が出土している。またHP-4の覆土からスクレイパー（23）が出土している。1～10は石鏃。1～8は有茎のもの。2、3は4以外は凸基である。1は有茎平基で先端と基部は折れている。側縁は鋸歯状を呈する。2、3は厚手でやや太い茎を有し、返しは左右非対称である。3は側縁の加工は丁寧だが、裏面右側縁の中央付近は剥離がうまく抜けず分厚くなっている。4は基部に挟りが入る。側縁は鋸歯状で表面左側縁は浅く内湾する。裏面は素材面を大きく残す。5は加工が雑で未成品の可能性がある。6は先端部が折れている。基部から茎部の両面にわずかに黒色付着物が認められる。7は表面の加工が粗雑である。8は先端部を大きく欠失し、左右は非対称である。9、10は無茎凹基。小形で先端部及び返しが丸みを帯び、裏面に素材面を残す。両面に散発的に黒色付着物が認められる。10は厚みがあり、左右非対称である。表面中央付近と裏面左側縁の中段は剥離がうまく抜けずに階段状の剥離痕が認められる。11は石槍。両面加工で下端に打面を残し、側面は反る。両側縁共に中央付近で屈曲が認められ、身部と茎部の境である可能性がある。12、13は篋状石器。12は丁寧な両面加工が施される。刃部は両刃で両側縁の加工後に作り出される。刃縁は曲刃だがやや偏りが認められる。13は腹面の上端部以外の3辺に雑な加工が施される。末端部の刃部は両面から作り出されるが、被熱のためか剥離面はあばた状を呈する。両側縁も刃部として使用している可能性がある。14はつまみ付きナイフ。つまみ部は素材の末端の形状を生かし、その両側に加工を施し挟り部を作り出している。周辺に細かい剥離痕が不規則に認められ、表面の左側縁下部に刃部が作り出される。15～23はスクレイパー。15～21は刃部が外湾するもの。15、16は石核素材で、15は刃部が表面の下半部に認められる。刃部の加工は丁寧である。16は正面と裏面の左側縁に刃部が作り出される。17は横長剥片素材で先端部と下端部の背面に刃部が作り出される。腹面の加工は厚みを取るためのものと考えられる。19は片面周辺加工のもので裏面左側縁に刃部が作り出される。石核素材の可能性がある。20は腹面に周辺加工が認められる。パルプ除去のための加工が施され、石鏃等の未成品の可能性もある。21は横長剥片素材のもの。22は刃部が内湾する。背面に大きく自然面を残す。23は背面末端部に弱い鋸歯状の刃部を作り出している。24～26は磨製石斧。24は裏面の大部分を欠失する。裏面以外の面には敲打痕を残す。刃部付近は横及び斜方向の丁寧な研磨が施される。両刃で偏刃気味の円刃である。正面と側面の間の稜線及び鑄の作り出しは弱く明瞭で

はない。25は両刃で刃面は緩やかに湾曲する。刃縁の形態は偏刃である。26は偏平で基端部と刃部の一部を欠失する。主面は縦及び斜方向の、側面は縦方向の研磨を受ける。正面の鑄は弱く右上がりになる。両刃で刃縁はやや偏刃気味である。裏面の鑄は明瞭で、横方向の研磨により急角度の刃部を研ぎ出している。27は砥石片。両面共にかなり使い込まれており、くぼんだすり面を形成する。裏面はすり面が2面認められ、周辺には擦痕が認められる。28は魚形石器未成品。素材の隙に周縁部から打ち欠きを施し、全体の整形を行っている。裏面に部分的に素材面を残す。両面全体に加工が認められるが、中央付近の厚みがうまく取れなかったためか、研磨は施されずこの段階で放棄されている。29～32は三角形礫石器。29は底辺中央が浅く湾曲する。残りの2辺の作り出しは粗雑である。30は右辺の加工は粗いが、残る2辺の加工は比較的丁寧である。左辺は浅く内湾する。31は右辺は外湾し、裏



図Ⅲ-26 H-12出土の土器(1)



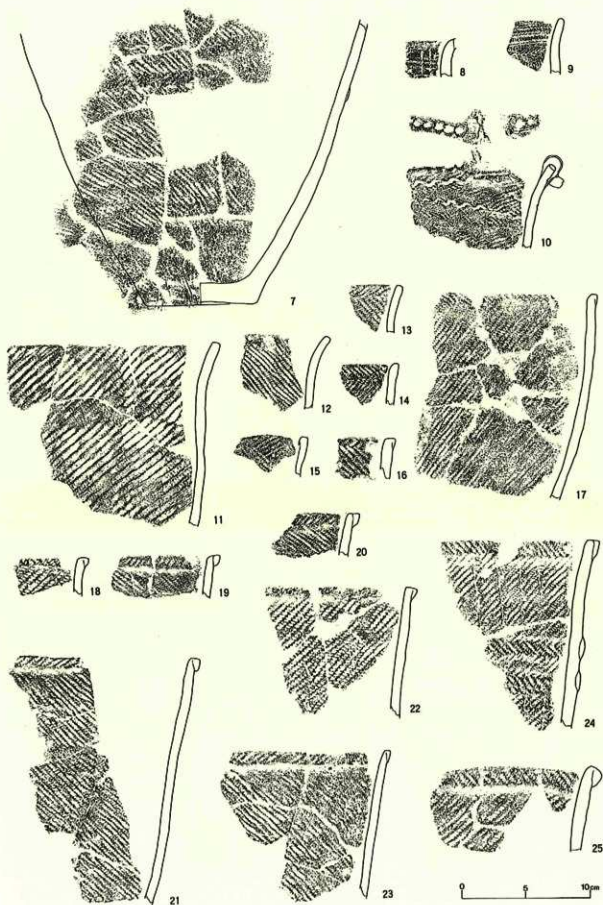
図Ⅲ-27 H-12出土の土器(2)

面からの細かい加工は正面に抜けていない。32は表面に素材面を残さず、右下角を欠失する。33は青竜刀形石器で刃部上半～柄部を欠損する。全面を細かい敲打痕により整形している。刃部は弱くすられ、平坦である。刃部以外研磨が認められないため未成品の可能性もある。

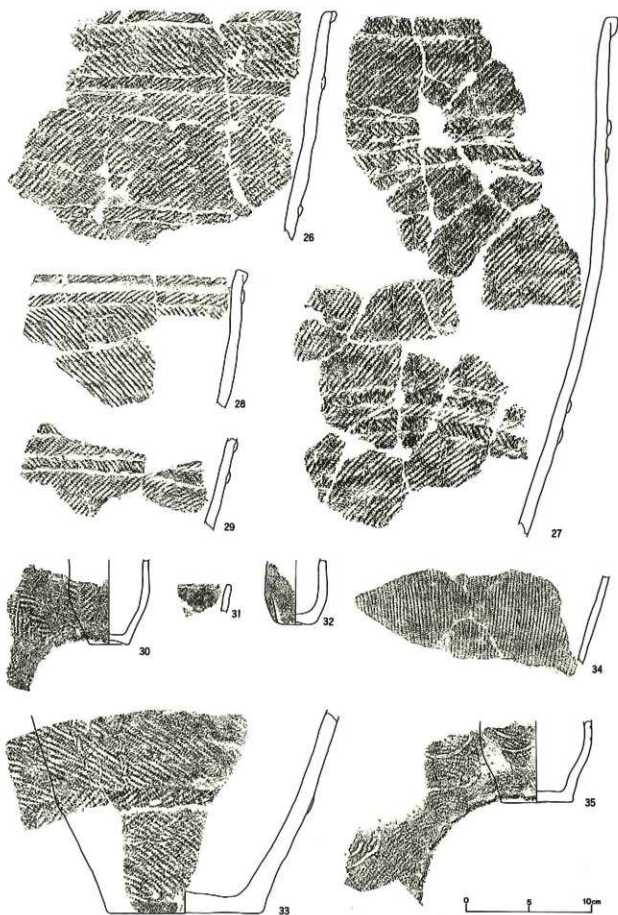
(広田良成)

35は円盤状土製品である。Ⅳ群A類とみられる土器片を利用している。36は三角形土製品である。表面は剥落している。Ⅳ群A類とみられる土器片を利用している。37は焼成粘土塊である。表面に指頭や紐状のものによるとみられる圧痕が認められる。色調は浅黄橙色である。

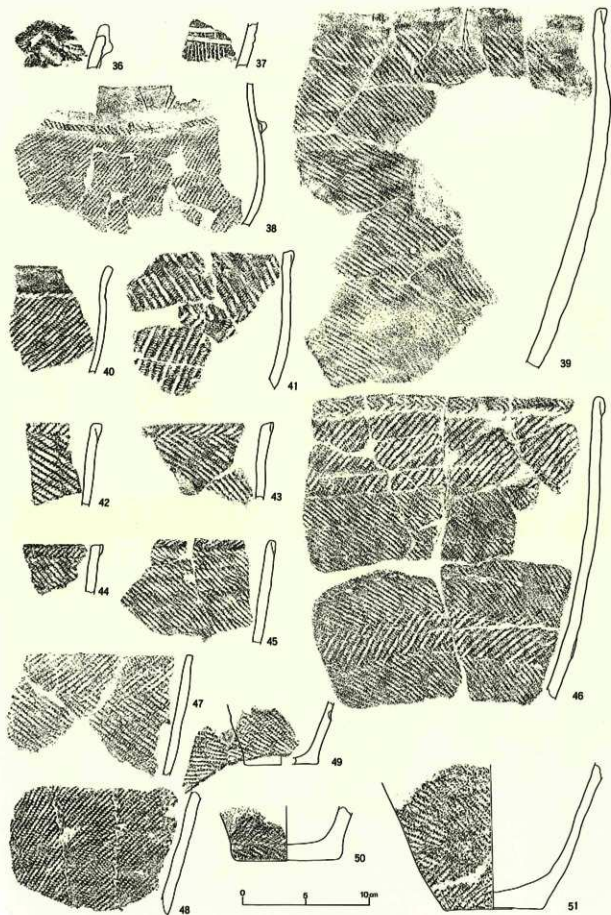
(立田 理)



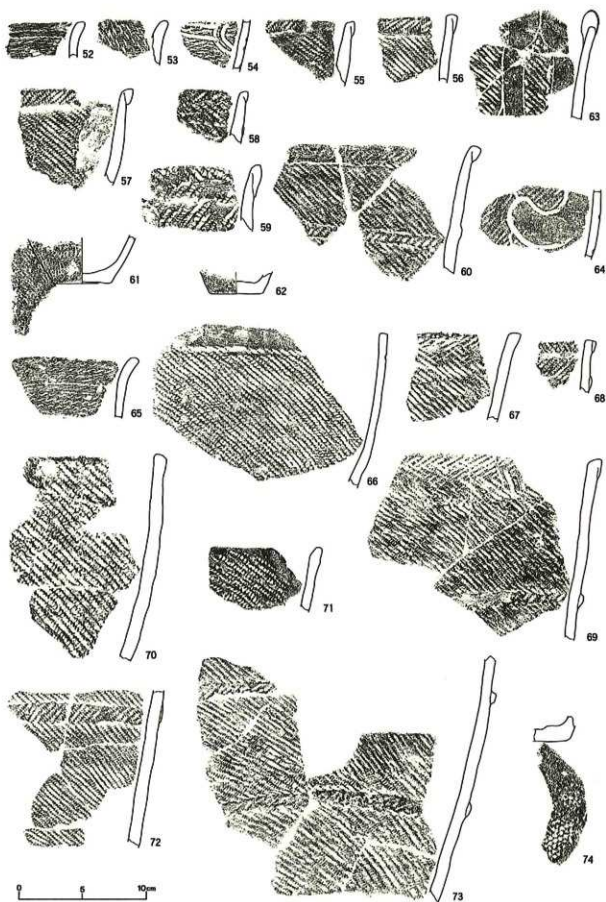
図Ⅲ-28 H-12出土の土器(3)



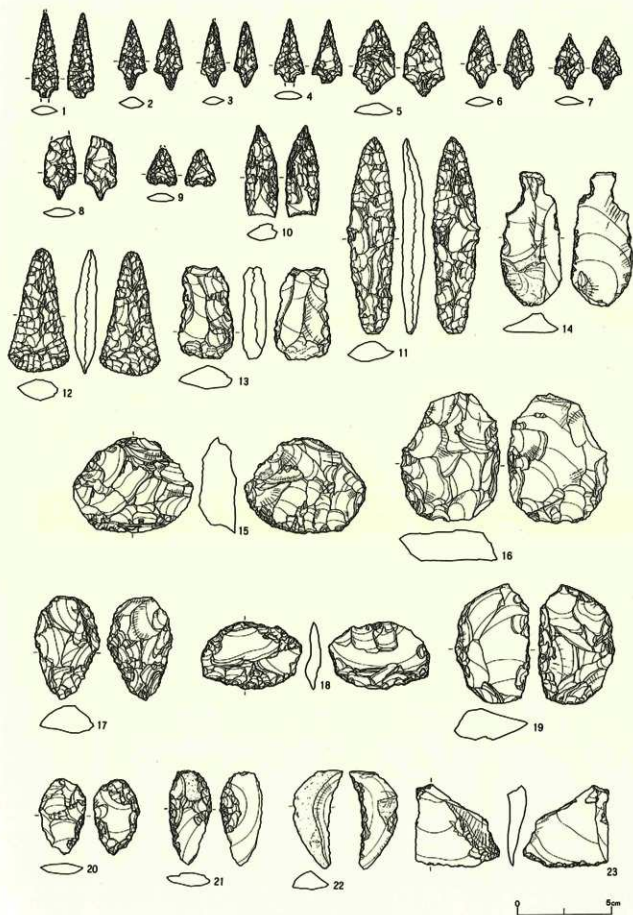
図Ⅲ-29 H-12出土の土器(4)



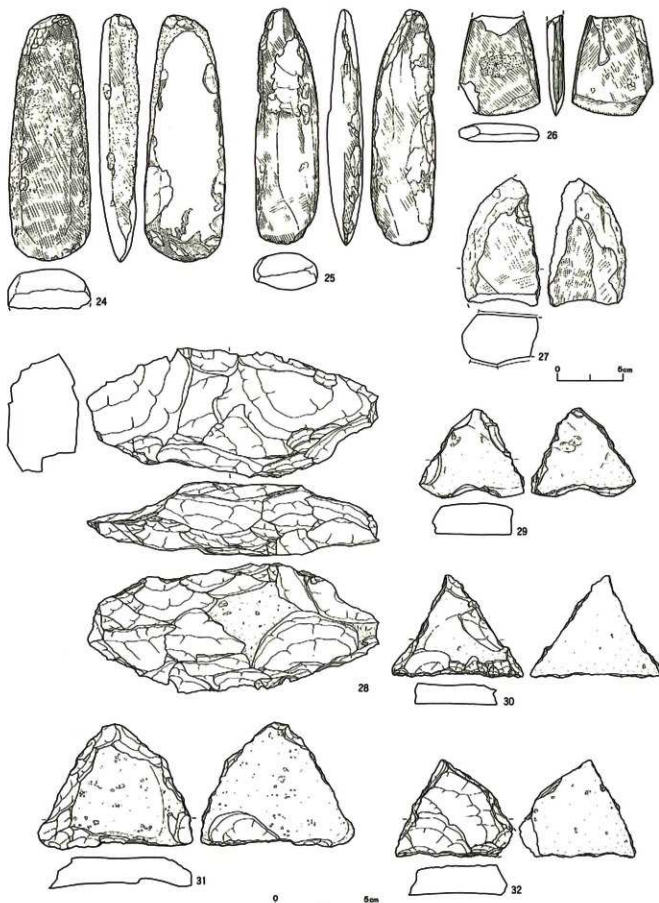
図Ⅲ-30 H-12出土の土器(5)



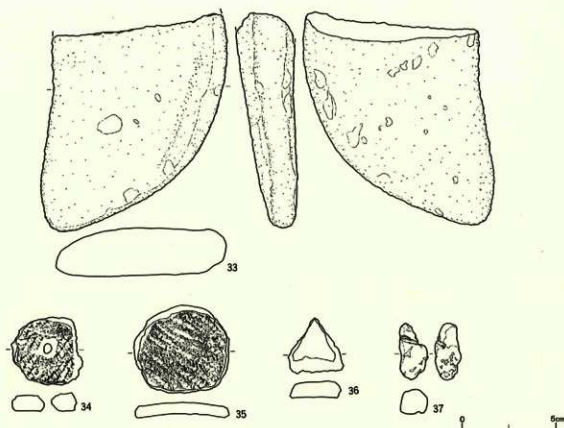
図Ⅲ-31 H-12出土の土器(6)



図Ⅲ-32 H-12出土の石器(1)



図三-33 H-12出土の石器(2)・石製品(1)



図Ⅲ-34 H-12出土の石製品(2)・土製品

H-18 (図Ⅲ-35~37)

位置 R-14・15、S-14・15 規模 6.96×4.36/6.54×4.16/0.34

特徴 調査区南西部の平坦面にある。Ⅲ層上部で長円形の大きな浅い窪地となっていた。X-20の調査過程で遺構であることを確認していたため、窪地の長軸方向とそれに直交するベルトを残して調査を進めたところ、大型の住居跡と分かった。平面形は長軸方向の一端が細くなる卵形に近い長円形。長軸方向はほぼ南一北であり、南側が細くなっている。Ⅲb層中から掘り込まれ、床はⅤ層中にある。床面には少し凹凸があり、壁はほぼ全周で急に立ち上がる。床面の中央から南寄りの位置には炉跡がある。炉跡は浅く窪んでいて、南側半分は炉石で囲まれている。炉跡には厚さ10cmほどの焼土が残っていた。炉跡周辺は広い範囲で非常に硬くしまっており、Ⅴ層の粘質土が貼り付けられている部分もある。南側の先端部には住居跡に伴う約50×65cmの浅い土壌がある。底からⅣ群A類土器の底部(3)が底面を下にした状態で出土した。土壌底面の四隅と外側の壁際からは径5cm前後の小ビットが5個検出された。この土壌は祭壇のような施設であった可能性もある。住居跡の床面からはこのほかに15個の小ビットが検出されている。平面図には各小ビットの床面からの深さをセンチメートル単位で示している(図Ⅲ-35)。住居跡南側の先端部の覆土からは焼土がまとまって検出された。炭化材は検出されていないが、このあたりの覆土には細かい炭化物が多く混じっていることから、焼失家屋の可能性はある。住居跡西半分の覆土上部からは10~30cmほどの礫が多く出土した。埋没過程の窪地に廃棄されたものであろう。

遺物(図Ⅲ-38~40)

土器：床面からⅡ群B類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類(1、3、4)、炉跡からⅣ群A類(2)、覆土からⅡ群B類、(5、11)、Ⅲ群B類(6、7)、Ⅳ群A類(7~17)が出土した。1は縄文が疎らに施された小型の土器。2は口縁部に貼付帯の施されたもので口唇断面は角張る。貼付帯には横位施文、体部には縦位施文の縄文が施されている。3は先端部の付属ビットの底から出土した底部の破片。底面には縄文が施されている。4は縄文の施された胴部破片。5は山形突起のある口縁部で、浅い横位の条痕文の地に突起部から3本の縄線文が縦に施され、体部との境には横位の縄線文が2条めぐる。11は細かい結束羽状縄文が施されたもの。6は捻糸文が施されたもので口唇断面は丸い。7には斜行縄文が施されている。8~10は口縁部に縄線文が施されたもの。12~15は貼付帯が施されたもの。12は貼付帯上も体部も横位施文の縄文が施されている。13~14は貼付帯に横位施文、体部には縦位施文の縄文が施されている。17は口縁部がやや外反するもので、やや幅の広い折り返し口縁になっている。口唇断面は丸い。16は折り返し状の口縁に貼付帯が施されたものである。18、19は縄文の施されたものである。18は口縁部に幅の狭い無文帯を残し、体部には縦位施文の縄文が施される。19は撚りの異なる原体で羽状縄文が施されている。20は無文。

(工藤研治)

石器：床面から石錐(2)スクレイパー(5)、Rフレイク、剥片、砥石、石皿・台石(7・11)、礫・礫片、覆土から石鏃(1)、つまみ付きナイフ(3)、両面調整石器、スクレイパー(4・6)、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、磨製石器片、磨製石器剥片、石皿・台石、(8・10)礫・礫片が出土した。また、9の石皿・台石は炉石に転用されていた。1は有茎凸基の石鏃。薄身で両面に素材面を残すが、加工は非常に丁寧である。形態からはⅥ群に伴うものである可能性が高い。2は石錐。縦長剥片素材で2側縁の加工により剥片の一端に棒状の機能部を作り出す。打面は自然面である。3はつまみ付きナイフ。背面に周辺加工が施され、腹面側は上端部及び左側縁下部に散発的に加工がある。末端部には細かい剥離痕が認められる。4~6はスクレイパー。4は下部を欠失し、刃部は外湾する。5は偏平な礫を素材とする。刃部は直線状で末端部に両面からの加工により作り出されている。正面上半部の大きな剥離は刃部を作り出す部分の厚みを取るための加工で、刃部を作り出す準備段階の加工と考えられる。6は1側縁に内湾する刃部をもつ。上端の折れ面にも加工が施され、刃部の可能性がある。7~11は石皿。7、8、10は小形である。7は円礫の平坦面にすり面が認められるもの。裏面より表面の方が使い込まれている。被熱のため部分的に変色している。8は表面のほぼ全体にすり面を形成する。すり面は浅く皿状にくぼむ自然面を利用し、下端部には掃き出し口と考えられる打ち欠きが認められる。9は大形のもので、1側縁に欠失が認められる。下半部に大きく平坦なすり面が認められる。すり面周辺にはすり面に切られる細かい敲打痕があり、敲打によりすり面を作り出していると考えられる。10は断面三角形の礫の2面に平坦なすり面がある。すり面は平滑である。11は大形の礫を素材とし、すり面は2面認められる。表面下端部には細かい打ち欠きがあり、自然のくぼみを利用した掃き出し口と考えられる。裏面も同様の作りである。

(広田良成)

H-18

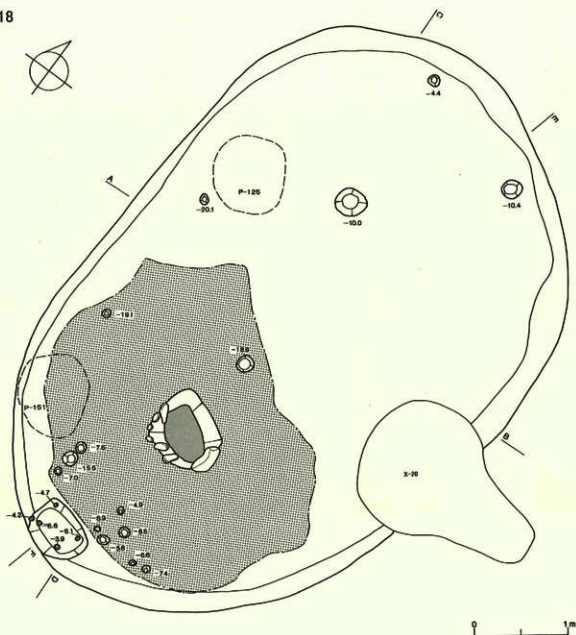
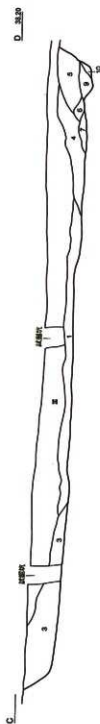
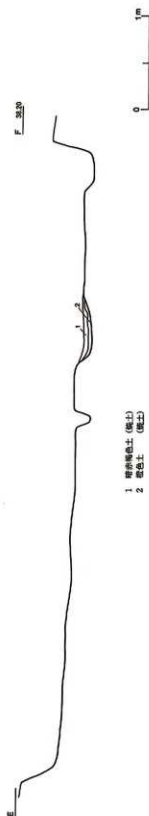


图 III-35 H-18(1)

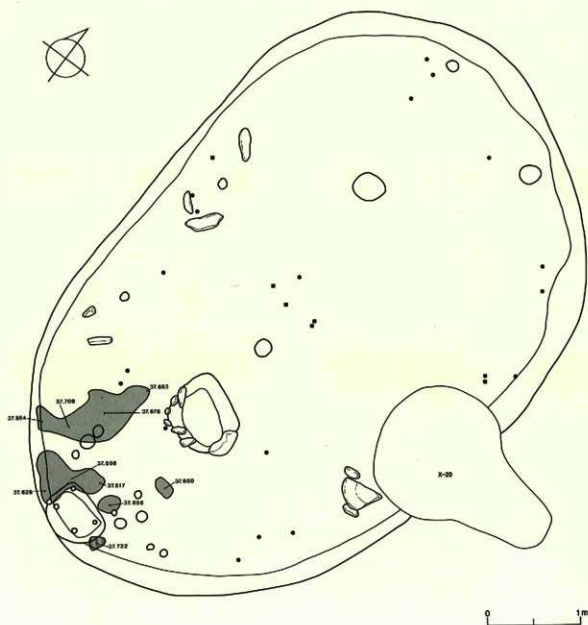


- 1 沖積色土 (灰褐色土が少し混じる)
- 2 砂色土
- 3 砂色土 (灰褐色土が多少多く混じる 灰化層、腐土混じる)
- 4 砂色土 (灰褐色土が多少多く混じる)
- 5 砂色土 (灰褐色土が多少多く混じる)
- 6 沖積色土 (粘土)
- 7 沖積色土
- 8 沖積色土
- 9 沖積色土 (灰褐色土が多少多く混じる 腐土少し混じる)
- 10 沖積色土

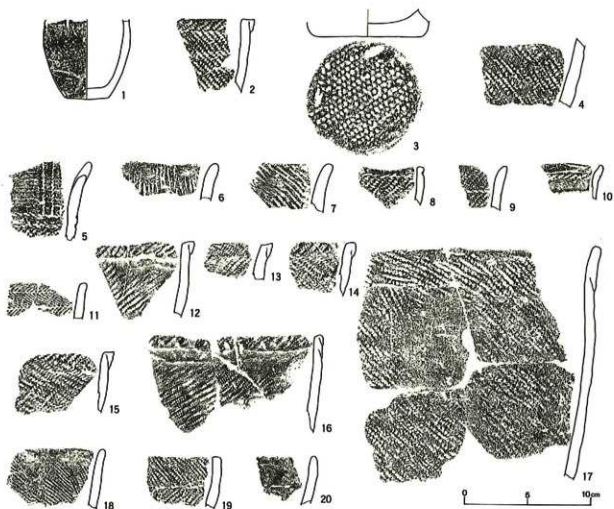


- 1 沖積色土 (粘土)
- 2 砂色土 (粘土)

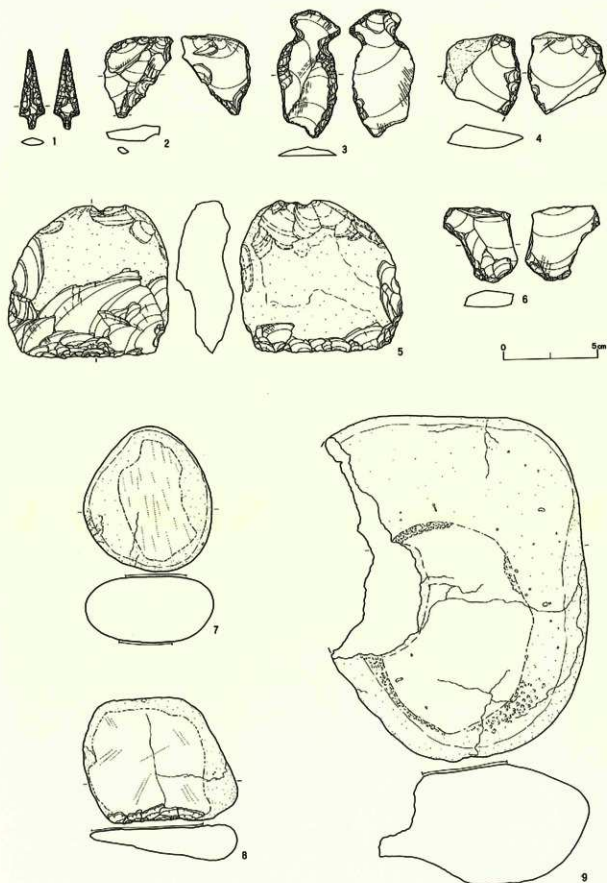
図面-36 H-18(2)



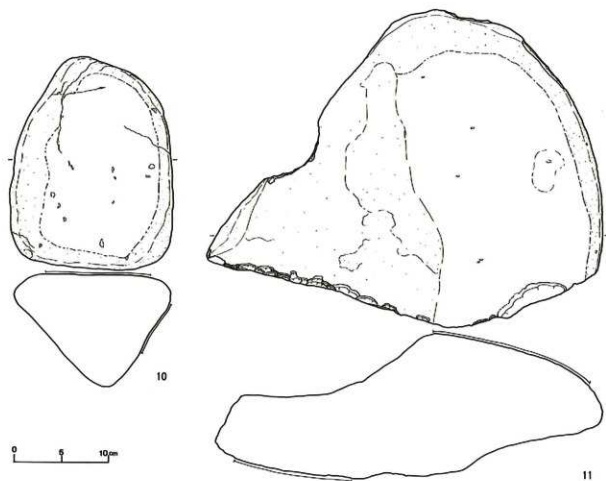
図Ⅲ-37 H-18(3)



図Ⅲ-38 H-18出土の土器



図Ⅲ-39 H-18出土の石器(1)



図Ⅲ-40 H-18出土の石器(2)

H-19 (図Ⅲ-41)

位置 Q-13・14、R-14

規模 (5.00)×(3.72)/4.62×(3.50)/0.36

特徴 調査区西部、段丘平坦面の突端部分に位置する。Ⅲ層上面で緩やかな落ち込みが認められた。落ち込みの中心を通るようにほぼ東西、南北方向に直交するトレンチを設定してⅤ層まで掘り下げた。その結果、東から南にかけての壁は粘土採掘穴状土塊群を切って構築されていることが確認された。平面形は南西から北東方向に長軸を持つ楕円形に近い卵形である。床はほぼ平坦であるが南西方向に若干傾斜している。炉は石組炉で、竪穴長軸上の先端部寄りに位置する。炉石は竪穴の短軸方向にのみ平行に配置され、抜き取り跡はなかった。焼土は石囲の中心よりやや北側で検出した。最大厚は23cmである。石組炉から先端ビットの間の範囲に床の硬化がみられた。硬化面は細かい凸凹がある。ビットは6基検出した。先端ビット1基、中央ビット1基、柱穴とみられる小ビット4基である。先端ビットは南西端に位置し、平面は不整形である。中央ビットは竪穴長軸上の北西寄りに位置する。平面形はほぼ円形で、浅く、壁は緩やかで墳底はやや凸凹している。覆土は灰褐色シルト質土である。柱穴はすべてほぼ垂直で覆土は黒褐色土である。

時期 縄文時代後期初頭、余市式の時期のものとみられる。

(立田 理)

遺物 (図Ⅲ-42~44)

土器: 床面からⅣ群A類、覆土からⅠ群B類(2)、Ⅱ群B類(3、4)、Ⅲ群(5)、Ⅳ群A類(1、6~11)が出土した。2は口縁部が外反する小波状口縁のもので条間の広い縄文が施されている。3には口縁部に横位の条痕文が施されている。4は縄文が疎らに施されたもの。5は摺糸文が施された底部でⅢ群B類と思われる。1は口縁部に貼付帯が施された平縁の深鉢。口唇断面は丸みを帯び、部分的に口唇の内側が削げている。LRの原体で貼付帯には横位施文、体部には縦位施文の縄文が施されている。6は口縁部が外反するもので薄い貼付帯が施されている。貼付帯は横位、体部には縦位に施文された縄文が施されている。7、8は縄文の施されたものである。7は口縁部に斜行縄文、体部には横走ぎみの縄文が施されている。8は口縁部に幅の狭い横位施文の縄文、体部には縦位施文の縄文が施されている。9、10は貼付帯が施された胴部の破片である。11は縄文が施された底部。

(工藤研治)

石器: 床面から剥片、磨製石斧(6)、石皿・台石(13)、礫・礫片、覆土からは石鏃(1・2)、つまみ付きナイフ、筥状石器(3)、スクレイパー(4・5)、剥片石器片、Rフレイク、石核、剥片、磨製石器片、磨製石器剥片、たたき石(7~10)、すり石(11)、砥石、石皿・台石(14)、加工痕、礫石器片、礫・礫片、三角形礫石器(15)が出土している。また12の石皿・台石は炉石に転用されている。1、2は石鏃。1は有茎凸基で、左右非対称のもの。表面右側縁の部分的な屈曲は側面の稜線を直線状に整えるためと考えられる。裏面は素材面を残す。2は無茎凹基で周辺加工のもの。正面左側縁には階段状の剥離が認められる。3は筥状石器。縦長剥片素材で片面周辺加工のものである。正面右側縁に直線的な刃部を作り出しており、形態は筥状石器だが、スクレイパーに含めるべきかもしれない。4、5はスクレイパー。4は正面左側縁と右側縁下半部に刃部を作り出す。刃部には微細な剥離痕が認められる。5は小形で1側縁に両面加工による刃部を作り出す。6は磨製石斧。片刃だが正面からの刃部の研ぎ出しは弱い。裏面は斜方向の研磨により刃部を研ぎ出しており、鋤も研磨方向に沿って左上がりになる。刃縁の形態は偏刃である。7~10はたたき石。7は円礫の下端にたたき痕をもつもの。たたき痕はいくつかの面を作る。8、9は周縁にたたき痕が認められる。8は大きなたたき痕と細かいたたき痕の2種類のたたき痕が認められる。前後関係は前者の方が古い。9は球状

H-19

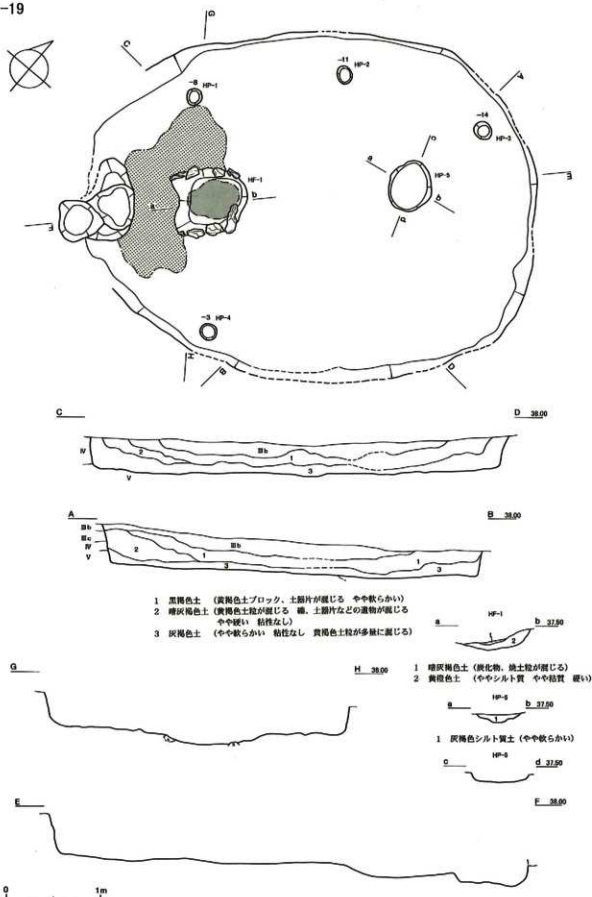
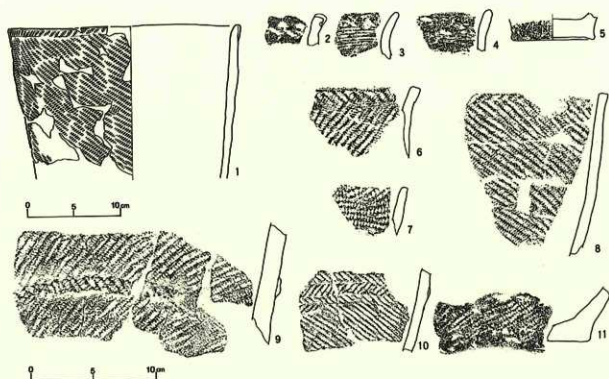


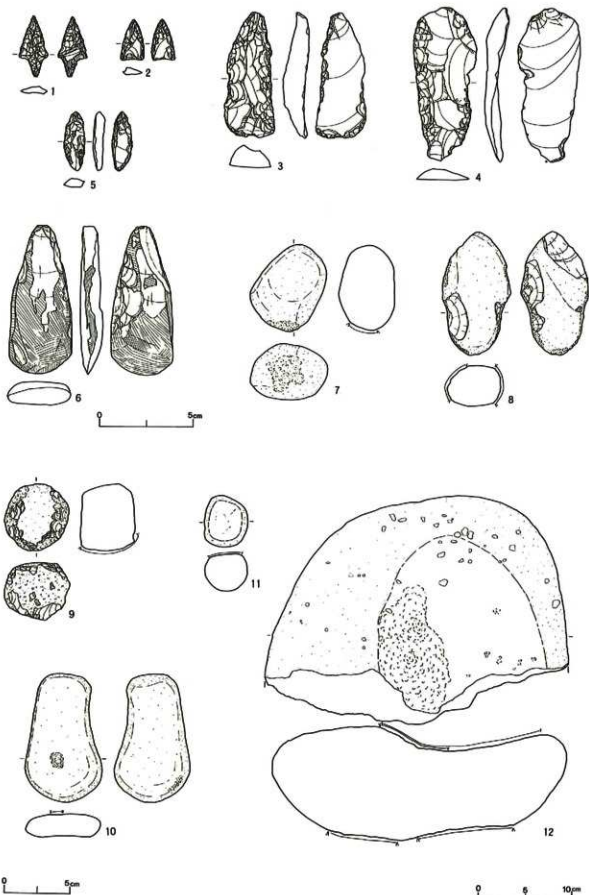
图 III-41 H-19



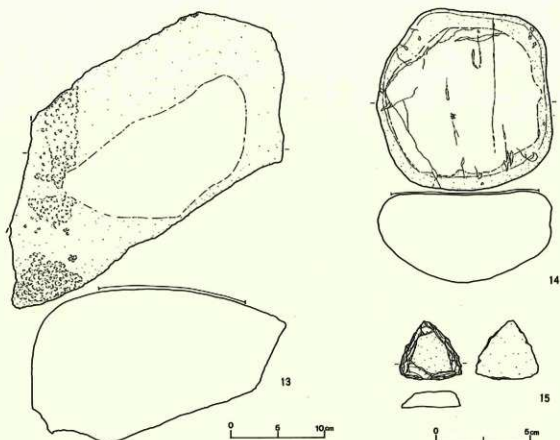
図Ⅲ-42 H-19出土の土器

を呈する。石質は珪質頁岩で数カ所の剥離が認められるため、石核の転用品の可能性もある。10は偏平礫の平坦面に、小さく浅いたたき痕をもつ。正面は部分的に被熱のため変色している。11はすり石。正面はほぼ全体にすり面を形成する。12～14は石皿。12は下半部を欠失する。すり面は大きくくぼんでおり、正面のすり面は敲打によりすり面を作り出している。すり面内に整形時の敲打痕が残る。裏面も同様である。13は大形の礫片を素材とし、すり面は滑らかである。すり面の左側にはあばた状の浅い敲打痕が認められる。14は正面のほぼ全面にほぼ平坦なすり面を形成する。右下部分に自然のくぼみがあり、掃き出し口として利用した可能性がある。15は三角形礫石器。3辺ともやや外湾するが、周縁部の加工は細かく丁寧である。

(広田良成)



図Ⅲ-43 H-19出土の石器(1)



図Ⅲ-44 H-19出土の石器(2)・石製品

H-20 (図Ⅲ-45)

位置 S・T-14

規模 $3.39 \times (1.65) / 3.23 \times (1.62) / 0.26$

特徴 調査区西端の平坦面に位置する。14ラインの壁面に土層断面が確認できたものである。P-117・120・124を切って構築されている。平面は全容は不明であるが、検出できた形は東と北に丸い角を持つ不整の台形である。壁はやや急に立上がるが、北側の方向にのみ緩やかである。床は平坦である。北東側の壁に沿う溝を一条検出した。北東側の壁から50cmほどで止まっており、巡らない。柱穴は確認できなかった。

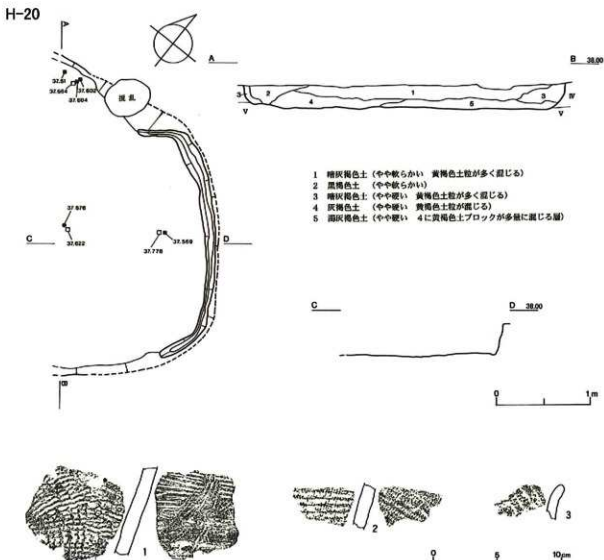
時期 不明

(立田 理)

遺物 (図Ⅲ-45)

土器 覆土からI群A類(1)、I群B類、II群A類、II群(2)、II群B類(3)が出土している。1は貝殻の腹縁部による押し引き文が施されたもので内面にも条痕文が施されている。根崎式に相当するものである。2はLRの原体で横走縄文が施されたもので、内面には斜行縄文が施されている。胎土には繊維が含まれている。3は山形突起のある口縁部である。

(工藤研治)



図Ⅲ-45 H-20と出土の遺物

H-15 (図Ⅲ-46)

位置 S・T-13

規模 (2.73)×(1.23)/(2.70)×(1.20)/0.57

特徴 調査区北西隅の緩斜面に位置する。V層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。P-54、P-96、H-16と重複するが、これらよりも本遺構が古い。遺構の大部分は調査区域外に及んでおり全容は不明である。確認できたプランも住居とするには根拠に乏しいため、住居様遺構とした。

時期 不明

(立田 理)

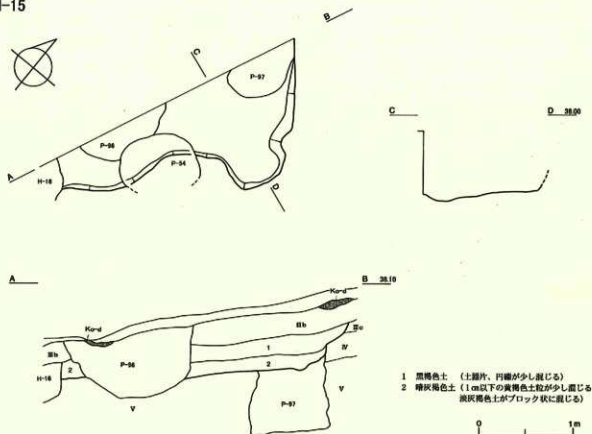
遺物 (図Ⅲ-47)

土器 覆土からⅡ群B類、Ⅱ群、Ⅲ群A類、Ⅲ群B類、Ⅳ群A類(2)、Ⅵ群(1)が出土している。1はⅥ群土器の底部。2は口縁部近くの破片で刻み目の付いた貼付帯が施されている。

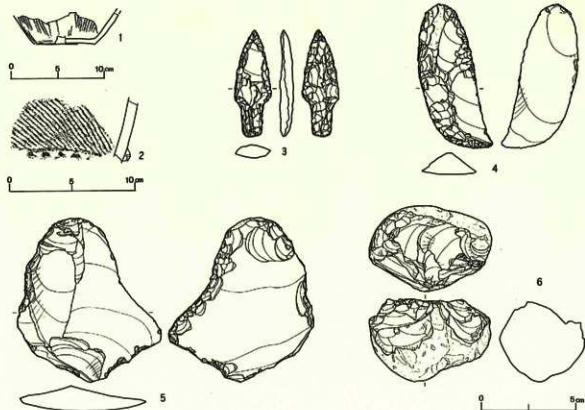
(工藤研治)

石器 床面から礫、覆土から石鈎(3)、スクレイパー(4・5)、Rフレイク、石核(6)、剥片、磨製石器剥片、たたき石、加工痕礫、礫石器片、礫・礫片が出土している。3は石鈎。側縁はやや外

H-15



図Ⅲ-46 H-15



図Ⅲ-47 H-15出土の遺物

湾し、側面の稜線は素材の形状の影響で反る。両面に素材面を残すが、全体的に加工は丁寧である。裏面の両側縁の加工は特に細かい。4、5はスクレイパー。縦長剥片素材で背面2側縁に刃部を作り出す。左側縁の刃部は丁寧に作り出され、右側縁に比べて分厚い。刃部には両方共に微細な剥離痕が認められる。末端部は尖頭状を呈する。5は縦長剥片素材で、刃部は腹面左側縁に作り出され刃縁は内湾する。刃部の加工は丁寧である。6は石核。作業面は2面で、使用していない作業面を交互に打面している。剥片を数枚取った段階で放棄している。

(広田良成)

H-16 (図Ⅲ-48)

位置 S-12・13

規模 $(1.27) \times (0.62) / (1.05) \times (0.56) / 0.48$

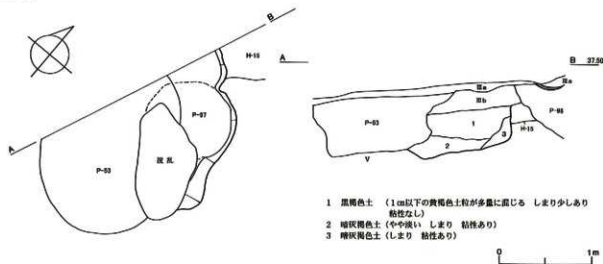
特徴 調査区北西隅の緩斜面に位置する。発掘調査区境界の土層断面で確認できた。H-15、P-53と重複するが、H-15より新しく、P-53より古い。遺構の大部分は調査区域外に及んでいるため全容は不明である。確認できたプランも住居とするには根拠に乏しいため住居様遺構とした。

遺物 出土していない。

時期 不明

(立田 理)

H-16



図Ⅲ-48 H-16

(2) 土墳墓

P-5 (図Ⅲ-49)

位置 N-15

規模 $0.93 \times 0.80 / 0.74 \times 0.37 / 0.52$

特徴 IV層中部で円形の黒褐色土の落ち込みとそれを取り囲むように黄褐色土が環状に堆積しているのを確認できた。半割して調査したところ土墳墓とわかった。平面形はほぼ円形。底は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面の南西隅からベンガラが検出された。

遺物 出土していない。

(工藤研治)

P-5



図Ⅲ-49 P-5

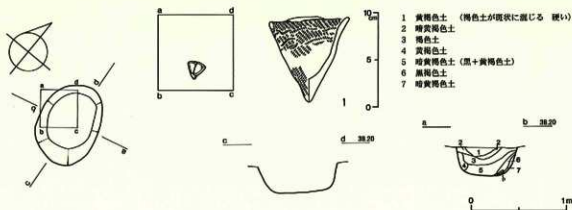
P-6 (図Ⅲ-50)

位置 N-15

規模 $0.87 \times 0.64 / 0.60 \times 0.47 / 0.30$

特徴 V層上面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認できた。半割して調査したところ遺構とわかった。平面形は長円形に近く、長軸はほぼ北-南である。底は平坦であり、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面から小型のⅡ群A類土器が1個体つぶれた状態で出土した。ベンガラは検出されなかったが覆土の堆積状態や遺物の出土状況から墓の可能性が高いと考えられる。

P-6



図Ⅲ-50 P-6と出土の土器

遺物 底面からⅡ群A類土器が出土した(1)。1は小型の尖底土器である。口縁は緩やかな波状を呈し、器面には結節の回転文が施されている。胎土には繊維が含まれている。

(工藤研治)

P-19 (Ⅲ-51・52)

位置 M-17・18

規模 $(0.96) \times 0.85 / (0.76) \times 0.45 / 0.48$

特徴 X-5の調査中、北西側のⅢ層下位によこた暗黄褐色土が広がっており、X-5と重複した遺構の存在を想定していた。Ⅳ層からⅤ層の上面で暗褐色土の落ち込みがみられたため長軸に沿って半截し、土壌であることを確認した。

平面形は長楕円形と思われる。壁は急な角度で立ち上がり、北側では段がつく。東側ではP-24と重複し、南東側はX-19と重複している。本遺構は前者より新しく後者より古い。覆土は埋め戻されたものと考えられる。墳底は東側がやや深くなっており、西側と南側の2ヶ所でベンガラが検出された。

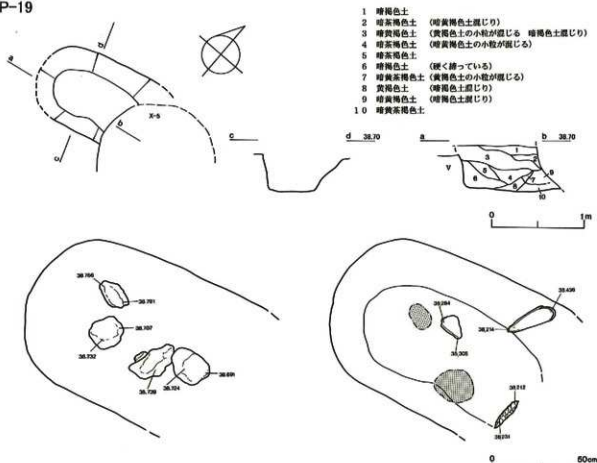
遺物の出土状況 覆土下部から磨製石斧1点、両面調整石器1点が出土している。磨製石斧は刃部を上にして土壌の北壁に立てかけられた状態で出土した。両面調整石器は長辺を南北に向けて土壌の東側で出土した。(図Ⅲ-51右下) またⅢ層調査中に礫4点がまとまって出土したが(図Ⅲ-51左下)これらは本土壌にともなう可能性がある。覆土堆積状況、ベンガラ、出土遺物からみて、墓と思われる。

(中田 裕香)

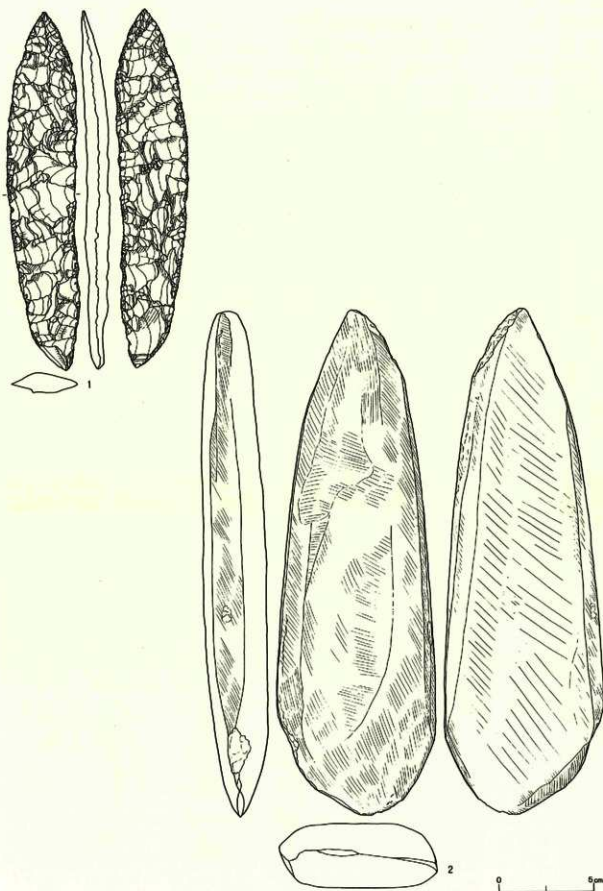
時期 覆土の堆積状況やベンガラ、出土遺物からみて、縄文時代前期の墓と思われる。

(中田 裕香)

P-19



図Ⅲ-51 P-19



図Ⅲ-52 P-19出土の石器

遺物 (図Ⅲ-52)

土器 覆土からⅡ群A類、Ⅳ群A類土器が出土した。

石器：覆土から両面調整石器（1）、磨製石斧（2）、剥片、礫・礫片が出土している。1は大型の両面調整石器。左右は非対称で、正面中央付近の対向する浅い抉りの部分で柄部と身部分かれる。両面共に丁寧な平坦剥離が施され、精巧な作りである。全体的に薄身で、身部は柄部より薄い。裏面の右側縁中央付近に赤褐色の附着物がわずかに認められる。ナイフ的な用途が考えられる。2は大型の磨製石斧。正面は主に縦及び斜方向に、裏面は斜方向に丁寧に研磨される。主面には側縁付近で数本の稜線が認められる。鋤は正面では刃縁付近にわずかに認められ、裏面にははっきりしない。全体に丁寧に研磨が施される。刃縁には研ぎ残しによる細長い面があり、実用品ではない可能性が高い。

(広田良成)

P-20 (図Ⅲ-53)

位置 N-18

規模 $(0.81) \times 0.60 / 0.49 \times 0.32 / 0.18$

特徴 P-19の平面を確認するために周囲を清掃中、Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みが検出された。

平面形は楕円形である。南壁は急な角度で立ち上がる。墳底は平坦である。墳底の南端にベンガラが確認された。

遺物の出土状況 覆土下部からつまみ付ナイフが2点出土している。1点はベンガラの中から、1点は北東側の壁際から出土している。覆土の堆積状況、ベンガラの存在から墓と思われる。

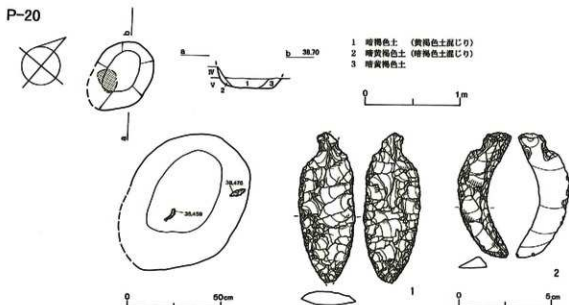
(中田 裕香)

時期 不明

遺物 (図Ⅲ-53)

石器：1、2はつまみ付きナイフ。1は左右対称に近い形状のもので、つまみ部の一部と末端部を欠失する。両面加工で平坦剥離により丁寧に作り上げられている。側縁には細かい剥離痕が認められる。2は縦長剥片素材で、つまみ部の抉りは一方のみ作り出される。片面周辺加工で稜線は右側縁に偏り、右側縁に急角度の刃部をもつ。

(広田良成)



図Ⅲ-53 P-20と出土の遺物

P-21 (図Ⅲ-54)

位置 M-18

規模 $0.98 \times 0.71 / 0.76 \times 0.50 / 0.40$

特徴 V層上面で汚れた黄褐色土の広がりとして検出された。

平面形は不整楕円形である。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は黄褐色土を主体とし、埋め戻されたものと考えられる。墳底は平坦でほぼ全面にベンガラがみられた。

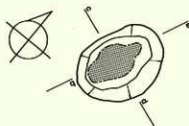
覆土やベンガラの堆積状況からみて、墓と思われる。

(中田 裕香)

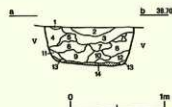
遺物 出土していない

時期 不明

P-21



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 | 8 黄灰色土 (黄褐色土の塊が少量混じる) |
| 2 暗灰黄褐色土 (黄褐色土の塊が混じる) | 9 純黄褐色土 (黄褐色土の塊が混じる) |
| 3 灰黄褐色土 (少量の黄褐色土が混じる) | 10 純黄褐色土 |
| 4 灰黄色土 (よごれた黄褐色土混じる) | 11 黄灰色土 |
| 5 純黄褐色土 (黄褐色土の塊が混じる) | 12 純黄褐色土 (黄褐色土の塊が混じる) |
| 6 黄灰色土 | 13 灰黄褐色土 (部分的に紫色が帯びる) |
| 7 暗褐色土 | 14 純褐色土 (ベンガラ) |



図Ⅲ-54 P-21

P-40 (図Ⅲ-55)

位置 R-13

規模 $1.43 \times (0.64) / 1.00 \times 0.60 / 0.58$

特徴 調査区西側の斜面部に位置する。X-19の調査中に確認した。調査の結果X-19・P-42と重複する遺構であることが判った。Ⅲb層中部から掘り込まれている。覆土はⅢ・V層が混入した埋め戻しである。南西側の壁・墳底はX-19の構築時に失われている。墳底はP-42の覆土中に作られており、やや凹凸がある。壁は西側を除いて急角度で立ち上がる。

遺物の出土状態 覆土の上部から人頭大の礫がまともって出土している。墳底からはまとまった礫と潰れた鉢形土器が出土している。さらに土器と礫の間にはベンガラが確認された。これらの遺物等は土墳の北側で確認されている。

時期 出土した土器からみて縄文時代前期後半のⅡ群B類土器の時期と考えられる。

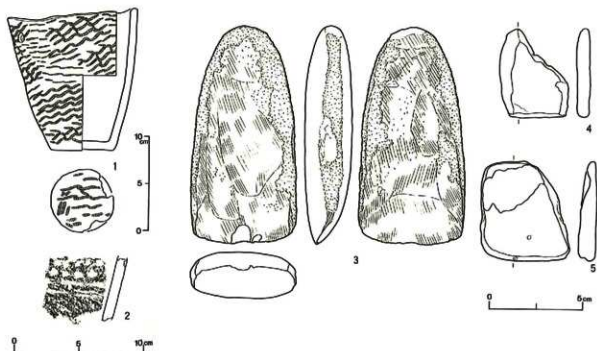
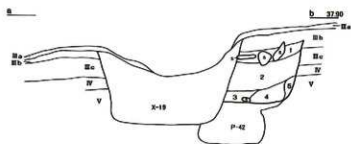
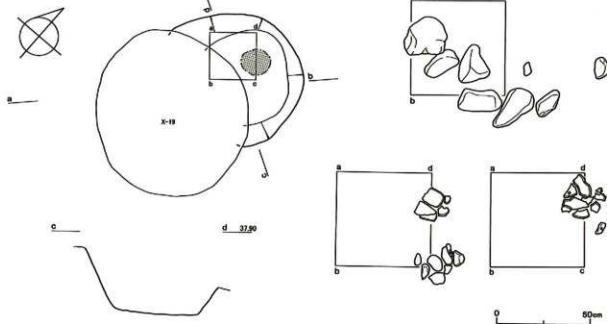
(佐藤和雄)

遺物 (図Ⅲ-55)

土器 墳底からⅡ群B類土器(1)、覆土からⅡ群B類、Ⅱ群、Ⅲ群A類土器が出土した。1は墳底から出土した小型の鉢形土器である。器表面と底面には葺き瓦縄文が施されている。

(工藤研治)

P-40



図Ⅲ-55 P-40と出土遺物